
Collect Waste Articles

佐久謙一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Collect Waste Articles

【Nコード】

N3455I

【作者名】

佐久謙一

【あらすじ】

ぼーっとして、友人と馬鹿話をして、テストに頭を悩ませて。何の変哲もない学校生活を送っていた。それなりに楽しんでいた。ある日、突然現れた転校生。そして新任教師。

その日から、俺のありふれた日常は少しずつ歪んでいった。

序章 天国と地獄？

人間誰しも過去に戻りたいと思うときがあるだろう。何か大きな失敗を犯してしまったときや、命の危険に晒されたときなど。

今、彼はそう思っていた。とにかく、ただひたすらにそう思っていた。

日は完全に沈み、薄い雲と重なり、ぼやけた光を発する月が、地上を見下ろしている。

夜とはいえ人の数は多く、あちらこちらで談笑や、店が流す音楽などがあふれ、まだまだ都市が活動していることを証明している。

人口の光の中、人々はそれぞれの夜を満喫していた。

そんな中、彼は絶体絶命の危機に瀕していた。

今までの人生で、一度も体感したこともなく、そしてこれからも一生無縁のものだと思っていた。そう信じたかった。

彼は考える。

どうすれば良い……？

どうすれば俺は助かる……？

彼をこんなにも悩ませている原因、それは

「なあ、今俺達、金がなくて困っているんだよなあ……」

「ほら、よく言うじゃん。人間困っているときは、お互い助け合っ
つて」

「だからさあ〜、君も人なら、そういう心を持っているよねえ〜
〜」

こいつらだ。

彼を取り囲んでいるその三人は、別に金がなく、明日をも知れぬ
わが命、と言うわけではない。

ただ単に遊ぶ金が欲しいだけの集団　そう、一言で言うところ
のヤンキー、不良だ。

そして、彼は今、その不良集団に絡まれている最中である。

くそ、何でこんなことに……。

彼は、考える。どうしてこうなったのかを……。

……わ、分かるかああああ！！ だって俺は何もしてないんだぞ！ コンビニに夜食買いに行こうとしていただけなのに……！ 何で……何でこんな連中に絡まれないといけないんだああ！

彼は、心の中で必死に叫んだ。

ちなみに、ここまでの経緯はこうである。

彼が通っている高校で三日後、中間テストがある。そのため、夜遅くまでテスト勉強をしていた。それで少々小腹がすいたので、コンビニまで足を運んでいたのだ。

ああ、やっぱり外に出ず、冷蔵庫の中の、ちよっとピンク色になっていた食パンを食べていれば良かったんだ。ちくしょう、おれの馬鹿、アホ、ボケ、間抜け。

そもそも外に出る気はなかったのだが、自分は何故か、薄い雲が重なって、ばやけた感じの光を発する月が好きなのだ。

ソレで何故か機嫌が良くなり、なんとなく外に出て、近道の路地裏を歩いていたのだが……。

月にむらくも花に風とはよく言ったもの。

その言葉どおり、彼は不良に絡まれたのだ。

ど、どうしよう……とりあえず落ち着かないと……でも落ち着いたところでどうすんだよ……でも、反乱狂になるよりはいいのかな？ ……ああああ、もう！ 誰でもいいから助けてくれえええ！！

彼は必死に祈った。もしこれで助かることが出来るなら、今度から神様を本気で信じようと思うぐらい本気に祈った。

その時、その男は現れた。

「君達、ひよっとしてこの状況は、俗に言うカツアゲってやつなのかなあ……」

「ああ？」

不良達は声のもとに顔を向ける。

「誰だ、てめえは？」

不良の一人は、その男を睨みながら言った。

路地の入り口の人影。そこには、やたらと自信満々な笑みを口元に浮かべた、一人の青年がいた。

年はおそらく二十代前半ぐらいだろう。

髪を適当に二つに纏め、白いカッターシャツとかなり色落ちしているジーンズを着ており、その上から、足元を覆うほど長いベージュのコートを纏っている。

不良のドスの効いた声にも動じず、悠然と立つその姿は何かを感じずにはいられない、まさに、威风堂々といった感じだ。

その男の登場に彼は心の中で歓喜した。

序章 天国と地獄？

た、助かった……ああ、神様ありがとう……今まで、人間に作られた存在の癖に、何創造主振ってんだ、この野郎……とか思っちゃってて、すいません。これからは多分改心します。……四十%ぐらいの確立で。……もし、今度の期末テストで全教科満点取れたら八十%ぐらいにしよう。お願いね、神様。

コートの男の登場に、安堵感を感じ、調子のいいことを考え始める。

そんな中、コートの男は言った。

「君達、いくらお金がないからと言って、人から取っていいって訳じゃないんだよ？」

不良達を諭すように、コートの男は言う。

「悪く生きてもそこには何も無い。人間は常に清く、正しく生きなきゃ。うん」

いいぞ、もっと言ってやれ！

心の中でコートの男を応援する。声を出して言うと、怖いから。

「はあ？ てめえ何様のつもり？」

「調子乗ってんじゃねえぞ、こら」

案の定、男の言葉に不良達は口々に文句を言う。

「てか、寒いつてか、臭いつてか、よくそんな良い子振ったこと、平気で言えるよな」

こんな素晴らしい人に向かって、なんてことを言うんだ！

心清らかで、かなり腕の立つ（勝手に決定済み。だって不良相手に一人で挑むんだから、それなりに腕に覚えがあるでしょう……だよな？ じゃないと困るよ……マジで）んだぞ！

お前らなんか秒殺……いや、もう光殺だ！

彼の頭の中では、目の前のコートの男が不良達をボコボコにする図が出来上がっていた。

「良い子ぶる……か……」

コートは、先程の不良の言葉を呟いていた。そして、不良達に顔を向けると、言った。

「それじゃあさあ、君達は何で悪い子ぶっているの？」

「……………はあ？」

辺りに沈黙が訪れた。

「だからさあ、君達は何で悪い子ぶっているの？」
再び沈黙。

「……………お前、何言ってるの…………？」

沈黙を破り、不良は言う。

コートの男は続ける。

「だってさあ、そうでしょ？ 僕が良い事をして、周りから良い子と思われたい欲望を、良い子ぶるって言うなら、君達が悪い事をして、周りから悪い子と思われたい欲望は、悪い子ぶるって言えるよね？ それで一つ分からないんだけど、何で悪い子ぶるの？ 良い子ぶるのは分かるよ。そうすれば周りは慕ってくれるし、色々便利だからね。でも悪い子ぶるのは、分かんないなあ。そんなことしても周りから変に目を付けられるだけだし疲れるだけだと思うんだけど」

「……………頭大丈夫か…………？」

不良の言葉に、コートの男は言う。

「大丈夫、大丈夫。この前、精神鑑定したばかりだし、仕事も上手くいってるし。それにしても、さっき会ったばかりの僕の心配をしてくれるなんて、君達優しいねえ」

「……………」
あ、あの……………精神鑑定ってなんですか……………？

彼の頭の中に、一つの不安が生まれた。

ひょっとして、この人、腕に自身があるんじゃないかと、ただ

頭がおかしいだけなんじゃ……………いや、まさかそんな訳ないよなあ……………だよな……………？

誰に同意を求めているのか、分からないことを考え始める。

「おい、てめえ！ さっきから訳の分からねえ事ばかり言いやがって！ 喧嘩売ってんのか！」

遂に不良の一人がぶちギレ、コートの人に？みかか。

コートの男は、別に抵抗をすることもなく、襟を？みあげられる。

それでも、口元の笑みは変わらない。

「ぶっ殺すぞ、こらあ！」

不良が叫ぶ。

その不良の様子に、コートの男は、軽く息を吐きながら、言う。

「うゝん……………殺されるのは嫌だなあ……………そういえば、殺すとぶっ殺すってどう違うのかなあ……………悩むなあ……………」

序章 天国と地獄？

「ふざけんな、てめえ！」

不良が右腕を振り上げ、殴りかかる。

コートの男は、微笑んだまま、その拳を見つめる。余裕の表情だ。

あの表情！ やっぱ腕に自信があるんだ！ じゃないと、

あんな表情はできないよ。信じる者は救われるって本当だったんだ！

彼がそう確信し、安堵の表情を浮かべ、目を閉じて息を吐く。と、

同時、

バキッ！

「ぐふっ！」

鈍い音と、間抜けな呻き声が、聞こえた。

不良がやられたのだらうと思ひ、目を開けてみると 思わず我

が目を疑った。

そこには、地面に倒れた奴に、容赦無く蹴りをぶち込む男がいた。

容赦無い。

本当に容赦無い。

これでもかと言わんばかりに、容赦無い。

殺す気かと言わんばかりに……しつこいのでやめよう。

とにかく俺はその容赦の無さを言いたいのだ。

まるで鬼のような、それでいて楽しむような顔をして、容赦無く

人を蹴る。

なんか人の裏側を見たようで、重苦しい、不快な物が、体の中に

生まれる。

嫌な感じだ……自分は、ああはなりたくないな……。

その様子を見て、ただそう思う。

他人の苦しみを娯楽と一緒にしたくない……。

彼がそう考えていると、男が不意にこちらを向く。

その男の眼を見て、彼は言葉を失う。その、どす黒い眼を……。

し、しまった！ 悠長に考えてる暇は無かった！

彼はその場から逃げ出そうと思い、後退りしようとする。

く、くそ！ なんて脚が動かないんだよ！

彼は自分の震える脚を見る。

そして何度も頭の中で動けと命令する。

しかし脚は言うことを聞いてくれない。まるで体の動かし方を忘れてしまったかのようにだ。意思とは反対に、その場から動くことが出来ない。

そんな彼の様子に、男は口元に端を吊り上げ、笑みを作る。

そして、ゆっくりと彼に近付きながら、男は口を開く。

「金出さねえなら、次は手前の番だぜえ、こら」

男、もとい不良はそう言った。

そう、先程までボコボコにされていたのは、不良の方ではなく、コートの男の方だったのだ。弱かった。実に弱かった。俺でも勝てるんじゃないのかと思うほど弱かった。小学生でも勝て……！ つかいな……止めよう。

ちなみにそのコートの男は今、鼻と口からだらだらと血を流し、倒れている。情けない……情けなさすぎる。

そして今、不良の矛先は彼に向いている。不良は彼をじっくりと、まるで舐め回すかのように見る。彼はこの眼を知っている。この前テレビを見た。ハイエナがチーターの食べる肉を奪おうと集まり、そして今か今かと眼をたぎらせる。その姿に似ていた。あるいは俺が、それなりに金持ちだと知り、交際を求めてきた隣の席の女子の眼にも似ていた。

ああ……あの時の俺は若かった……。七十万近く貢がされたのも今となってはいい思い出。てか、やばい……やばすぎる……。

このままじゃ、俺のなけなしの財産が奪われてしまう！ か、神様助けて！ もう調子のいいこと言わないから！ 俺、あの人がやられているのを見ても逃げなかったんだよ！ えらいと思うよ、俺は！ 彼はとにかく自分を褒めた。褒めまくった。

すると、その自画自賛が届いたのか、不良の足が止まる。

「手前、まだ殴られてえのか？」

不良は視線を足元に向ける。そこには不良のズボンの裾をがっしりとつかむ一つの手があった。その手の主は勿論一人しかない。

「うう……殴られるのは嫌だなあ。僕、基本的に痛いのは嫌なんだよね」

「知るか！」

不良は、裾をつかむ手を振り解き、男の顔を踏み潰そうと脚を上げる。

すると、男は口元に微笑を浮かべ、コートの中に素早く手を入れる。

序章 天国と地獄？

「これだけは使いたくなかったけど……」
「っ！？」

不良は、男の笑みと言葉の迫力に押され、上げた脚を宙で停止させる。

その間に男は立ち上がり、ゆっくりとコートの内から手を引き抜く。

こ、この展開で出てくる物は、もしや拳銃！？ あの人は実は私服警官とか言うオチだったのか！？ なるほど……それならあの人の余裕面も納得できる。

彼はかたくなに、そう信じた。そして神への改心率を六〇%ぐらいにした。

その場に沈黙が下りる。

誰も全く動かず、次に何が起きるかを静かに待つ。

風の音。そして遠くから聞こえる雑踏の声。

コートの男は、ゆっくりと手を引き抜いた。

「っ！」

不良の眼が見開かれる。

驚愕。

不良の眼にはそれがありありと現れていた。

「な、な……」

口を動かし、何かを言おうとするが、余りのことに言葉が出てこない。脚も震えている。

そんな不良の反応に満足したのか、コートの男は、にっこりと微笑み、自らの手に持つ物をゆっくりと不良に向ける。

「さあ……」

コートの男はゆっくりと不良に近付く。

一歩一歩ゆっくりと。

コートの男が一步近付くたび、それに比例して不良の震えは増していく。

「これを……」

不良の目の前にはそれが突きつけられていた。それがより不良の震えを激しくする。

彼も震えていた。コートの男の持つものに……。

驚愕と畏怖の眼差しの中、コートの男は微笑みの顔をそのままにこう言った。

その言葉は、その場の全員をさらに震え上がらせることになった。それは

「受け取ってくれ」

……………結論から言おう。

この男は警官でもなんでもなく、懐から出した物も、凶器でもなんでもなかった。そう、それは……。

「い、いいのか！ これ貰っちゃっても!？」

「うん、構わないよ」

コートの男は大きく頷く。その言葉と同時に、不良が高らかに叫ぶ。

「ひゃっほう！ すごいぜ、これいくらあるよ？ もう一生遊び放題なんじゃないの？」

不良は仲間と共に叫ぶ。その不良の手にある物を、彼は呆然と見つめた。

それは……それは札束だった！

もう、諭吉さんオンパレード！

その分厚さは百万も軽く越す。おそらく五百万近くはあるだろう。その札束を両手に持ち、はしゃいでいる不良達を、コートの男は

満足気に眺めている。すると、不意に口を開く。

「ねえ、君達」

コートの中の男の言葉に、不良は振り返る。やや不満気な色が浮かぶ。
「何だ？ いまさら返せってか？」

「違う違う」

コートの男は頭を左右に振る。

「そうじゃなくて、この子」

そう言って彼を指差す。

「君達はお金が欲しくて、そして今その願いが叶ったんだから、この子にもう用は無いよね？ 逃がしてあげてもいいよね？」

その言葉に不良は口元に下卑た笑みを浮かべる。

「ああ、別に構わねえぜ。すげえ大金が手に入ったからな」

不良はそう言うと、彼らに背を向けて、去っていった。不良が去る間際、コートの男が不良に、

「これからはまじめに働くんだよ」

と、言った。義理で「ああ」と生返事が返ってきた。

序章 天国と地獄？

「……ふう、彼ら更生してくれるといいなあ」
不良の姿が見えなくなると同時に、コートの男は呟いた。

いや、あんな大金渡したら、逆に墮落すると思つのですが…

…。

彼は、満足気のため息を吐くコートの男を見つめる。

まあしかし、彼のおかげで助かったのもまた事実。ここは素直に礼を言うべきだろう。

「あ、あの〜」

彼の声にコートの男は、顔をこちらに向ける。

「ああ、君大丈夫だったかい？ どこもケガは無いかい？」

「あ、はい。大丈夫です」

彼は頭を下げる。

「本当にありがとうございました。おかげで金を取られずに済みました」

そこで顔を上げ、尋ねる。

「あ、あの〜……あいつらにやったお金……その、良かったんですか……？」

その問いに、コートの男はにっこりと微笑み、言った。

「大丈夫だよ。あれは元々彼等にあげる予定だったんだし」

「予定……？」

彼は疑問の声を漏らす、コートの男は微笑んだまま何も言わない。

そこで、彼は何か違和感を覚えた。

何とも言えない……。だが何かおかしい……。あれ、これどこかで……？

「それじゃ、これからは気を付けてね」

彼の疑問をよそに、コートの男は背を向け、歩を進める。

「あ、あの！」

彼はコート男を呼び止める。

男の脚が止まる。

「……………」

コート男はゆっくりと振り向く。

その顔には先程と全く変わらない笑みがあつた。

「……………」

彼はゆっくりと唾を飲み込み、問いの言葉を吐き出す。

「あの……あなたは何者なんですか？」

束の間の静寂。

コート男の笑みは変わらない。相変わらずの微笑み。

「僕はね……………」

コート男はゆっくりと言葉を発する。

「僕はね……………人なんだよ……………。神でも悪魔でもなく、ただの人なんだ。そう、皆と同じただの人……………」

ぶつぶつと。それは独り言に近い、言葉。

その眼は、誰も見ていない。

ぶつぶつと自分に言い聞かせるかのように何度も男は呟く。

「……………」

彼は後悔した。

下手なこと聞かないで、そのまま帰ってもらえばよかった。

彼は、コート男が自分で精神異常者だと言っていたことを思い出した。

「僕は……………僕は……………」

「あ、あの……………」

顔に先程と全く変わらない微笑みを浮かべたまま、ぶつぶつと呟くコート男。

かなり不気味だ。

「はっ！ あ、ああ、すまないね……。時々目の前が真っ白になつて自分で体が制御できないことがあるんだよ。ははは、参ったね」

「……………」
いや、ははは、じゃありませんよ。

「それじゃ僕はこれで」

コートの方は軽く手を上げ、踵を返す。

「……………」
彼はそれを呆然と見送り、やがて男の姿は見えなくなった。

「……………」
「はあ……………」

その場へナヘナと座り込み、彼は深く溜息を吐いた。

買い物一つでこんなに疲れるとは誰が予想しただろうか……………。

今度からこの道は通らないようにするか……………。

彼はそう思いながら、腕に巻きついていいる安物の時計の針を確認する。

「一時十分……………ああ、面倒臭い……………」

だが、やらなければならぬ。

いつも赤点ギリギリだし……………。

くそ……………学者共。どうでもいい知識ばかり後世に残しやがって……………。いったい何の役に立ってんだよ！

彼は再び溜息を吐く。

だが、ここで悪態ばかりついても無意味にむなしさばかりが生まれる。

「止めた。さつさと帰って勉強するか……………」

この空腹は、家のパンで満たすとするか……………。

彼は立ち上がり、軽く肩を回す。

「えっと、まず数学やって……………英語もちよつとやばいな。ああ科学もやばいなあ……………あと世界史と古文もやばい……………てか、全部じやん！」

彼は再度溜息を吐く。

「自己嫌悪しても意味無いな……………。今は少しでも内容を覚えねえと

……つて、あれ？」

ふと彼の眼にあるものが止まった。

「？」

眼を凝らし、脚を近くまで運ぶ。

そこには一つの銀色のケースが落ちていた。

模様も何も無いシンプルなケース。

「何だ、これ？ シガーケースか？」

彼はそれを拾い上げ、いじくり回す。

不良共には不似合い。てことは、あの人のか。

先程のコートの男を思い出す。

やばい、笑顔で不気味に笑っているところしか思い出せない。

彼はケースをどうしようか迷ったが、ここに置いておくよりは、

自分で持っていたほうがいいだろうと判断し、それをポケットに仕舞った。

一章 ためいき？

午後の昼休み。

ひたすらに眠い授業から開放される、ひと時の時間。

だが、空に浮かぶ太陽が、暑いのか暖かいのか分からない熱線で、地上をじりじりと焼き、気温が嫌というほど、ぐんぐん上がる。

それでも生徒達は、暑さに負けず、それぞれの昼休みを友人と共に満喫する。

「両者、いい勝負です」

そんな中、中庭のベンチに腰掛け、飲むヨーグルトを片手に、焼きそばパンを貪り食っている男がいた。

適当に分けた髪に、ボタンを二つ開けた学ラン。形だけのベルトに裾が地面に付き、端が破れたズボン。

顔は良くも無く、悪くも無く、どこにでもいそうな平凡顔。悪く言えば、目立たない。唯一印象的なのが、額を覆うように巻かれた包帯だった。

「巧みに攻撃をかわし、カウンター。だが、避けられた」

パンの最後の一口を口に放り込む。ヨーグルトを流し込み無理やり飲み込む。

「ハイキック、さらに回転してのネリチャギをかまし……お、決まった」

先程から彼は何をしているのか？ それは

「はい、女の勝利です」

頭の中で、カンカンとゴングを鳴らしつつ、彼はそう呟いた。彼は実況中継をしていた。

その対象は向かいのベンチにいる男女のカップルだ。

彼がこのベンチに来ると、二人が喧嘩をしていた。それがあまりにも激しいので、暇つぶしに見物していたのだ。

「女、とどめに男の喉に足を振り下ろした……って、さすがにあれ

「はやばいか？」

止めに入ろうと立ち上がるが、女は男の襟首をつかみ、そのままずるずるとどこかに引きずっていった。

「……………」

彼は再びベンチに腰掛ける。

軽くため息。

「暇……………」

彼はそう呟き、ポケットからタバコの箱を取り出す。そして一本手に取り、口にくわえる。だが火は付けない。これだけで何かと落ち着くのだ。

そして何か暇つぶしになるものはないかと周りを見渡してみるが、誰もいない。

そもそもこの中庭のベンチはあまり人が寄ってこない。

春は花粉がやたら多く飛び散り、夏はやたらに蚊が多く、秋は銀杏臭く、冬は冷風吹きまくり。

だが、彼は別に花粉症でもなければ銀杏の匂いも嫌いじゃない。

それに、寒さには鈍感で、何故か蚊が寄ってこない体質なので、人が近寄らないこの場所は、まさに絶好の休息場なのだ。

木が揺れ、わずかな熱風が頬を撫でる。

風に揺れる雑草をボーッと眺め、軽く深呼吸。気分が落ち着いてきた。

そういえば今月の小遣いの残りが、そろそろやばいことになっていくことを思い出した。

残り二千元。次の小遣いがもらえるまで、あと二十日。一日平均百円までの計算になる。

え〜と、五日間の昼飯代が飲み物とパンで二百円。それ×五で千円……………って、もう半分無くなってるじゃん！

それからあらゆる試行錯誤を繰り返すが、結論。

無理です。一日百円って、一介の高校生にはきつすぎです。

てか、一ヶ月の小遣い三千円って少ないだろ……………多分……………。

また今月も、そしてこれから友人から借りることになるだろうという、先々に不安を覚え、ため息を吐く。

「はぁ……」と再度ため息を吐き、

「それにしても遅いな……」

と言い、彼は再び周りを見渡す。

そんなことを何度か繰り返し、もう何度目か分からない小遣い計算を再び始める。

それがいい感じに、仕上がりかけた頃、砂利を踏む音とともに、やたらとうるさい声が響いてきた。

「うわ、ここほんと蚊が多いなあ……。でも血を吸う蚊ってたしか全部雌なんだよね。だから僕に寄ってくるこの蚊達も僕の血を求めて集まってくる可愛い子ちゃんと脳内変換すれば……。良い訳無いか……」

聞き覚えのあるその声に軽くため息を吐きながら、首をねじりその声の主のほうに顔を向ける。

「遅かったじゃねえか、優」

一章 ためいき？

その声を聞くと、優と呼ばれた男は、軽く右手を上げ、白い歯を見せながら胡散臭い笑みを浮かべる。

一言で言うと、見た目はその名の通り、優男だ。多少の幼さを残したまま、大きくした感じ。日の光を反射する赤い髪の毛は、元からの色で、染めたわけではないらしい。

顔は綺麗に整っており、十人中、九人が声をかけそうな美形顔だ。「やっぱりここにいたんだねえ、轟」

そう言って、彼の隣に腰を下ろす。

「それにしてもいつもここにいるよね、轟は。ここ蚊が多いじゃん」
「俺は蚊が寄ってこない体質だからな」

そして眉をひそめ、

「てか、名字で呼ぶな！」
不快感を全く隠す様子も無く、言った。

先程から優が言っている轟とは、あだ名ではなく、また某芸人のことでもない。

そう、真正正銘の本名である。

「名前と呼べ、名前で」

不機嫌そうに顔をしかめ、彼は言う。

実質彼はこの名字があまり好きではない。

「どこが嫌いかと言うのは……言うまでも無いだろう。おかしい、ただそれだけ。」

親父は、自分の名字に誇りを持ってたの、先代から受け継いだ大切なものなの言っているが、俺自身こんな名字受け継ぎたいと思ったことは一度も無い。

もし結婚した時は、絶対に相手の嫁の名字にすると堅く決心している。

「ええ〜でもね〜」と優は不満そうに唇を尖らせ、

「なんか轟のほうがシツクリ来るって言うかさあ、孝二って名前、なんかこう……」

「地味だったか？ ほっとけ」

彼、孝二は、ふん、と鼻を鳴らす。

「いやいや違うんだよ。えくとなんて言うか……轟は孝二って感じじゃなくて、なんか轟きって感じなんだよね」

「どうゆう感じだよ」

孝二は、呆れたようにため息を吐く。

「て、言うか、あのさ……」再びため息を吐きながら、孝二は言う。

「今日は何人？」

唐突の問い。

その問いに、優はまたも胡散臭い笑みを浮かべ、口を開く。

「十一人」

「……………」

ため息。

「いや、しつこくてねえ。でも体は無傷だよ」

なおも同じ笑みを浮かべ、のんびりと話す。

その優の制服はところどころに、何か鋭利な刃物で切られたような後があった。

「でもナイフならまだしも刀剣って反則だよな？ 死ぬって！ て感じだったよ。しかもそれ本物なんだよ、全部。それでその刀を持った奴が五人いたんだけどさあ、そいつらなかなかの腕前でけっこう危なくてさあ」

「……………」

優の言葉を右から左に受け流し、軽く息を吐く。

今、優が話しているのは、小学生がやるような喧嘩自慢だ。内容は小学レベルではないが……というか喧嘩にレベルってあるのだろうか？

そんなことを考え、ちょっとした暇つぶしで、頭の中で適当に俺流論文を書き上げていると、優の制服から電子音が響く。今流行っているらしいアーティストの曲だった。

「お、美華ちゃんからだ」

優はそう呟くと、ポケットから、シールやらストラップが大量に付着した携帯を取り出し、カチカチと操作する。

「えっと、今日は、先約があるから、無理、っと」

それから何度かボタンを押し、終わったらしく、ふう、と息を吐きながら携帯をたたむ。

するとまたしても電子音。再び優は携帯を操作し始める。

「もう、しつこいなあ……沙紀ちゃん」

「別のやつかよ」

孝二はため息を吐き、呟く。

一章 ためいき？

「いったいお前、何人の女とメールしてんだよ……？ この前も十人ぐらいと遊んでなかったか？」

その問いに、優は「うん」とうなり、

「数えたこと無いけど、同級生の女子は、ほぼ全員のメールアドレス持つてるよ」

「……………」

「なにその軽蔑的な眼。そんな眼で見られると、なんか新しい趣味に目覚めそう」

「目覚めるな」

孝二は再びため息を吐く。

「まあ、別におまえが女子とどうしようが、俺に止める気は無いけど……………」

ため息。

「せめて、彼氏持ちのやつには手を出すなよ……………」

その言葉に、優は心外とばかりに腹を立てる。

「誤解を招くような言い方しないでよ。あれは僕が手を出したんじゃないくて、向こうから体を捧げてきたんだよ？ なのに僕だけ非難されるって納得いかない」

「おい……………体捧げてきたって、おまえまさか……………」

その問いに、優は孝二から眼をそらす。

「……………」

「あゝ、轟の言いたいことは、よく分かるよ。でも、なんて言うか……………つい欲望が暴走しちゃったんだよ……………だからそんなゴミを見るような眼で見ないでよ」

「ゴミじゃない。けだものだ」

「うう〜ひどい……………。まだ前の獣のほうがいいよ〜」

「同じだろ。漢字は同じ字だし」

孝二はまたもため息を吐く。

「いったいこれで何人目だ。いまさら言うのもなんだが、こいつの女癖の悪さは呆れてくる。」

優は、なおも反論する。

「何となく違う感じがするの！ だいたい轟だって千里ちゃんそんなことがあつたりしないの？」

「いや、それは……」

孝二は顔をうつむかせばそぼそと呟く。ちなみに千里とは孝二の恋人の名だ。

「ん〜？ なんか怪しいなあ〜。僕の知らない間にもう行くところまで行っちゃった？」

「馬鹿！ 行くか！」

顔を真つ赤にしつつ、優の頭をはたくが、あっさりかわされる。

「ふふ〜ん、轟もまだまだだね〜。そんな攻撃じゃ僕は倒せないよ〜。ところで」

優は口元に、女子の前では絶対に見せない下卑た笑みを浮かべる。
「千里ちゃんとはどこまで行ってんの〜？ すっごい気になる〜」

とりあえず殴る。

だが、かわされる。

「……………」

「動きがまだまだだよ〜。この距離では体を動かすと攻撃がばれちゃうから、もう少し腕の」

「あー、はいはい」

優の格闘論はとりあえず無視。

「轟〜、ちゃんと聞いてよ〜」

「五月の蠅並みに五月蠅い。はつきり言って何度も同じことを言うなよ」

「それはね、僕が轟に何を求めているかを詳しく知ってもらつたため。」

「重ねて学ぶは天なる才を生む」って、僕が尊敬する人も言ってるし」

「学びじゃなくて、ただしつこいだけだろ。だいたい誰の言葉だよ、それ」

「僕」

「……………」

「そしてこうも言っている。『欲望は人を形成する上で最も大切なもの。だから女の子に手を出しても仕方が無い』って」

「前半ともかく後半アウト。名言っぽくしてもダメ」

「え、どうして？ 正論じゃん」

「もし神がいるとしたら、おまえ即行処罰対象。……あとおまえ女の彼氏にも同じこと言っただろ？」

その問いに優は、

「うん」

と大きくうなずいた。

一章 ためいき？

「んで、そしたら『ふざけるな！』って、刀剣振り回してきたってわけなんだよ。そこで僕は」

「……………」
再び話が喧嘩自慢になってきたので、スルーする。

こいつはこういうところが無ければ良い奴なんだが……。

ちなみに孝二の彼女は優に全く興味を示さない十人中の一人なので大丈夫。

それにしても、まぶたが重たい。こりゃ午後の授業は爆睡確定だね。

孝二は大きく口を開け、眠気を吐き出す。

頬を撫でる風が心地良い。

まだなお言葉を吐き出すことを止めない優を尻目に、体の欲求に従い、眼を閉じる。

……………。

夜。

公園。

笑顔。

微笑み。

ぼやけた月。

ナイフ。

血。

悲鳴。

涙。

サイレン。

そしてコートの……。

「……………！っ」

突然下げている頭をがばっと上げ、眼を見開く。

「どうしたの？」

隣の優の声。

その声で、今、眼が覚めていることを体が理解していく。

「い、いや、なんでもない……」

右手を額に当て、息を吐く。右手の感触が、額の血管がどくどくと脈打っていることを知らせる。

「大丈夫？ 顔色悪いよ」

優が孝二の顔を覗き込む。

「ほんと大丈夫だ。ちよつと嫌な夢を……」

「？」

とりあえず深呼吸。そして眼をつぶる。

風の感触。

優の声。

周りの雑音。

匂い。

だるい暑さ。

それら一つ一つをゆっくりと体中にしみ込ませるようにイメージする。

水の中で漂うように。そしてその中にゆっくりと沈みこんでいく。深呼吸。

そして再びイメージ開始。

何度か繰り返し返したら、ゆっくり眼を開け、息を吐く。

これでだいぶ落ち着いていた。自己流の精神安定法だ。ぜひ皆さんもお試しあれ。

孝二はまぶたをゆっくりと上げる。

向かいのベンチで、先程喧嘩をしていたカップルの女のほうが、別の男といちゃついているのが眼に映る。

なんとという手の早さ。というより最初から二股をかけていたらしい。

孝二の脳裏に先程の男の気絶した顔がよぎる。

気の毒に……。南無。

「轟く大丈夫？」

勝手に男の冥福を祈っていると、隣の優が肩を揺さぶってきた。

「轟く返事……。じゃないと僕心配」

「……………」

肩をうつとつしく揺さぶる優。

「ああ、大丈夫だから。揺さぶるのを止めてくれ」

それでも揺さぶりは止まらず、ますます激しくなる。

「轟く、今日プールサボってたでしょ。こんな暑いのにプールサボるってどうしちゃったの。お馬な女子じゃあるまいし」

ガクガクと頭が揺さぶられ、脳がシェイクされる。

「ああ、大丈夫だって……。って、いい加減止める！」

そう言っつて、肩を掴んでいる優の手を払いのける。

優は払いのけられた手を、軽く握りながら言う。

一章 ためいき？

「ひどいなあ、僕は轟のことを心配して言ってるんだよ」
本気で心配してんのかよ、こいつ……。

とりあえず孝二は口を開く。

「ああ、悪かったな。でも俺のことは、ほっといてくれ。プール休んだのも、水があまり好きじゃないからなんだよ」

「水が嫌い？ どして？」

「いや、それは……」

優の問いに孝二は変に口ごもる。

その孝二の反応に、優は耳の上をぼりぼりとかきながら、唸る。

「うーん、水を恐がるか、それって狂犬病に良く見られる症状だったような」

「犬……」孝二は顔をしかめる。

「殴るぞ……」

「いやいやいやいやいや」

優は、顔に胡散臭い笑みを浮かべたまま、おどけたように首を横に振る。

「別に馬鹿にはしてないよ。狂犬病は人間にも感染するんだよ。でもたしか人間の場合は発病すると、物事に極めて過敏になり、狂躁状態となって、動物では目の前にあるもの全てに噛みつくことになって、これを狂躁型って言うんだっけ？ その後、全身麻痺が起こって、最後は昏睡状態になって死亡します」

「……」
「しかも潜伏期間は、長く一定せず平均で一〜二ヶ月を要するけど、時には七年間の例も報告されてるんだって」

「……なあ……」

「んで、人は水を飲む時に、その刺激で咽喉頭や全身の痙縮が起こり苦痛で水が飲めないことから「恐水症」とも呼ばれているんだっ

て〜。だから轟も気をつけないと〜」

「おい」

「うい？」

なおも変わらない拍子で肩をすくめて見せる優。

「お前さ、いつも思うけど……」

孝二はため息混じりに口を開く。

「なんで、そういうことに詳しいの？」

「ん〜、轟い〜」

優は右腕を孝二の肩に回し、体を近づけてくる。もう一度言つが、こいつは男だ。

「轟さあ〜、もうちょっとひねりのある質問して欲しかったよ〜」

「……なんだよ、ひねりって……」

とりあえず近づけてくる優の顔を、手で押しやりながら尋ねる。

「ん〜、例えば『そんなに詳しいってことは、さてはおまえ曲亭馬琴マニアだね』とかさあ〜」

「狂犬病からそこに行くまでの過程が理解できない。てか、曲亭馬琴って誰だよ」

「ええ〜知らないの〜。あの有名な『南総里見八犬伝』を書いた人なの〜」

「いや、八犬伝は知ってるけど作者までは……って共通点、犬だけじゃねえかよ」

その孝二のツツコミも無視し、優は語り始める。

「それでその南総里見八犬伝は全九十八巻百六冊、日本古典文学史上最長の雄編なんだよ。中身は戦国初頭の関八州を舞台に、犬と夫婦になる悲運の姫君と、仁義礼智忠信孝悌の文字が浮きでる八つの霊玉を持つ、八人の若き武士たちが活躍する物語で〜」

「おい」

「でも今は『読まれざる傑作』となっているんだって〜。もったいないよね〜」

「おまえは結局何が言いたいんだ？」

「それはね〜」孝二の問いに優は笑みをますます大きくし、口を開いた。

「秘密う〜」

とりあえず殴る。

だが、かわされる。

そんなこんなしていると昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。

「……………終わりが……………。次は古典……………。あ〜眠い」

「ふう、もつと轟いじりたかったなあ〜」

「……………」

とりあえず殴る。

だが、かわされる。

一章 ためいき？

「んじゃあね〜轟〜」

優は立ち上がり、軽く手を振りながら、去っていった。

「おお〜」

優に背中に返事を返し、軽く深呼吸。

「さて、俺も行くか」

孝二はそう呟くと、くわえていたタバコを吐き捨て、立ち上がる。

校舎の中に入り、階段を上がっていく。

いつもと変わらない日常。

授業を適当に過ごし、優と適当に馬鹿話をして、午後は自分の時間を過ごして、また明日。

世の中の流れや常識に縛られるのは嫌だという奴もいるかもしれないが、俺はこの流れに従って生きる日常が好きだ。

自由って言葉は響きが良く聞こえる言葉だけど、怖い言葉でもあるよね。

以前そう教えてくれた人がいた。

誰だったかは思い出せないが、その通りだと思う。

何かに縛られていないと、その人はその人ということすらも理解することが出来ない。

まず人は名前に縛られる。そして学ぶことで、言語に理論に支配されていく。そしてまず学という流れにその身を置く。そして、そして、そして………数えだしたらキリが無い。社会の流れに反発する者も、結局娯楽を求め、その流れにその身を置いている。いや、一つにくくりすぎだな。その縛られた中に自由があるんだ。人それぞれ自由……。でもそれじゃ自由という言葉自体が矛盾しているような気がする。自由って何にも縛られていない状態を言うんじゃないのか？ でも確か辞書では、自由とは自分の思い通りにできることって書いてあったけど、これってどうなんだろ？ それが世

一章 ためいき？

「……………」
沈黙。

今、教室は沈黙に満たされている。

誰一人として言葉を発しない。ただ静かに事の行く末を見守っている。

「え、えっと、ですね……………」

教卓に立つ教師が年に合わない、しどろもどろな声を出す。

「……………」
全生徒の無言の視線。それがプレッシャーになっているのだろうか。

何となくは分かる。生徒達の目は皆こう言っている。

(なんとかしろ)

(説明しろ)

(こいつらは何なんだ！)

「……………」
孝二自身も今、前にいる奴の説明が欲しい。納得のいくやつが。

「えっと……………」その、彼らは……………」

「おい」

「……………」

教室の沈黙が破られ、緊迫した空気で満たされる。

「教師。高々自己紹介に何故こんなにも時間が掛かる。この高校の教師の教員免許は飾りか？」

「……………」

突然の発言。これには教師も面食らったらしく、なにか発言しようとして口をパクパクと動かすが、何も出てこない。

その様子にさらに追い討ちがかかる。

「私は説明しろと言ったんだ。分からないのか？ 汚らしい数本の

毛が乗った頭晒して生きる度胸はあるのに自己紹介する勇氣は無いのか？ 惨めなものだな。貴様の性分もそうだが、その頭はさらに惨めだ。未練がましく毛を残さず、全て刈れば良いのに、何故残す？ 少ないからこそ大事にするとしても言いたいのか？ それが律儀だとも思っているのか？ 惨めだ、惨め過ぎる。そして哀れだ。そんな頭じゃ家族にも敬遠されているだろ。そして何もしていないのに満員電車で痴漢扱いされ、世間から白い眼で見られ、家族には離婚を迫られ、そして寂しい老後を一人で暮らし、惨めに死んでいくのだらうな。ああ、哀れすぎる。自分の生と頭を恨め」

「……………」
なんたる暴言！ てか、いつの間にか教師の優柔不断から頭、そして人生へとすごい流れ。もう先生の顔真っ白になってるよ。

この教師は確かに頭は薄いが、生徒達の人気は結構高い。案の定、周りから抗議の声が上がる。

「おまえ先生のこと何も知らないくせにごちゃごちゃ言っくな！」

「そうだ、この自己中野郎！」

「てか、おまえ何だよ！」

それらの声を聞き、そいつは教師への暴言を止め、彼らに顔を向ける。

「威勢はいいな。名乗ってやろう」

腕を組み、明らかに偉そうな態度でそいつは言った。

「私は七神真。見てのとおり転校生だ」

そいつ、真の挑発するような眼と笑みに、殺気立った空気が教室に満たされていく。

「ちなみに私と友人関係を築きたいという望みは全て却下する。つまり気安く話しかけてくるな」

「……………」

うわ、すごい奴来た。なんかの漫画みたい。

孝二はとりあえず真を観察する。

髪……………無茶苦茶校則違反。黒い綺麗な髪を後ろで束ね、それが腰

辺りまで伸びている。

顔……またまた校則違反。サングラスかけてるし。

しかもすごい長身。絶対百八十以上ある。すらりと伸びた手と足。まるでモデルのような美形男だ。髪が長いので、ぱっと見、女にも見える。そして……ここ肝心。絶対に高校生に見えない。明らかに、二十超えている。まあ、老け顔かもしれないけど。

真の観察を終え、次にその横に視線が移動する。

「教師」

再び真の言葉。教師は一瞬ビクリと肩を震わせる。

「この程度でいつまで落ち込んでいる。さつさと私たちを紹介しろ」

「は……はい」

すっかり消極的になった教師が彼らの紹介を始める。

「……まず彼は先程言いましたが、七神真君。そして」

教師はその隣に立つ人物に、顔を向ける。

「……………」

教師は軽く深呼吸をする。覚悟を決めたようだ。

「えっとね……」

その重い口を開く。

「お嬢ちゃん。ここは高校なんだけど……」

その教師の声に、

「うん！」

と、その子は大きく頷いた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

一章 ためいき？

教師は再び深呼吸。だからですね、と優しく諭すように言う。

「ここは高校生が勉強に来るところで、君のような子供が来るころでは……」

「私、十六ですう」

「……」
再び重い沈黙が降りる。

孝二は軽いため息を吐き、その子の観察を始める。

髪……同じく綺麗な黒髪を肩辺りで切りそろえている。校則違反ではない。

顔も服装も、これといって変なところはない。無いのだが……。

身長……絶対高校生じゃない。だって百三十も無いだろ、この子。小さすぎ、明らかに小学生。まあ、童顔幼稚体型なだけかもしれないけど。

「早く紹介してよ、早くう」

「……」

教師の深いため息。魂が抜けているような感じがするのはたぶん気のせいだろう。

「えー、皆さん。彼女は同じく転校生の七神舞ちゃん。真君とは兄妹だそうです。何故分かれずに、このクラスに二人が来たのは分かりません。いや、もうどうでもいいや……」

教師として言うてはいけないことを呟きながら、教師は教室から出て行った。

兄妹ねえ……。

孝二は、真と舞を交互に見比べる。

たしかに二人とも何となく似ている。特に髪が。だが、兄も妹も絶対に高校生には見えない。てか、大学生と小学生だろ絶対！

そんなことを考えながら、二人を見ていると、ふいに舞と目が合

った。にこりと、こちらに笑みを向けてくる。

その笑みに曖昧な笑みを返す。すると、舞がこちらに小走りで近付いてきた。

「私、七神舞。舞ちゃんって呼んでね」

孝二の机に手を突き、満面の笑みのままそう言ってきた。

「え、ああ、よろしく。俺は孝二って名前なんだ」

一応普通に返答する。

「孝二？ 名字はなんて言うの？」

「え、その……」

孝二は返答に詰まる。周りの奴も「そういえば孝二の名字ってなんだっけ？」と言い出した。

「いや、俺も呼ぶときは名前でもいいからさ。俺も舞ちゃんって呼ばせてもらおうし」

舞は、その言葉を聞くと、わずかに顔を赤らめ、そして再びにこりと微笑んだ。

「うん、ありがと」

それで、と舞は身を乗り出して尋ねる。

「あ、あの、このあと学校の中、その、案内してくれる？」

「いいよ、喜んで」

舞の頼みをあっさりと承諾する。それには周りからも、「手がはえ〜ぞ〜」や「積極的〜」や「おまえ彼女いるだろうが〜」「え、彼女居るの？ 誰、誰？」「ほら、いつも一緒にいる、えっと……確か名前は優とか言う、「アイツって男じゃねえのか？」「うわ、そっちの趣味あり？ 引くって」

「てめえら少し黙れ！」

とりあえず好き勝手言う周りの連中は黙らせとく。

「それじゃあ私ここに座るね」

と舞が、いつの間にか孝二の隣の席に就いていた。

「これからよろしくね」

そう、にっこりと微笑みかけてくる。

「あのさ、」

孝二は微笑み返しながら一言。

「そこ他の人の席なんだけど……」

その言葉を聞くと、舞は首をかしげながら言った。

「え？ でも今、誰もいないよ」

「いや、確かにいないけど……多分今日休みか何かなんだろうけど」

「じゃあいいね」

「いや、良くないでしょ。思いつきり」

「どうして、今はいないじゃん」

「今いなくても、そこは別の人の席で……」

それじゃあ、と舞は人差し指を立て、言った。

「その人が来るまで私はこの席。それでいいでしょ？」

「う、まあ、いい、のかな？」

一章 ためいき？

ああ言えばこう言う。結局孝二は観念した。

「ねえ、ねえ」

舞が尋ねてくる。

「孝二君ってさ、その……彼女とかいる？」

え、と孝二の口から小さく声が漏れる。

「いるぞ！ 舞ちゃん騙されるな！」 「孝二、てめえ二股かける気

か！ 死ね、変態、ホモ、ロリコン！」

「……………」

「孝二、悪かった。謝るからその赤い染みが付いた木刀を仕舞ってくれ」

「……………」

元から殴る気はない。とりあえず木刀を鞘に仕舞う。

「孝二君って剣道部？」

野次馬の声でタイミングを逸したことを悟ったのか、話題を変えてくる。

「ん、まあ、一応な」

謙遜的に答えると、舞がへえ、と感嘆の声を漏らす。

「すごいなあ、戦う男の人って、なんだかカッコイイなあ」

よくある褒め言葉。だが、誰にでも、褒められると嬉しいもので、舞の言葉に自然と頬が緩んでしまう。

すると、

突如殺気。

「！！！」

ビクリと、背筋に寒気が走る。

ものすごい冷たさ。心臓が一瞬でバクバクと脈打ち、全身を強張

らせる。

その発生場所は分かっている。後ろだ。

孝二はびくびくと後ろを振り返り、そこに座る者を見る。

そこには真がいた。

机に片肘を付き、こちらをその鋭い眼で静かに、ただ静かに見つめている。

「あ、あの、七神さん？ 何を怒っているんですか……？」

なぜか敬語になりつつも、尋ねる。

その孝二の言葉に、真はただ一言。

「話しかけるな」

「……………」

とりあえず前を向く。

そこで一つ疑問が生まれた。今、真が座っている席も誰か別の人の席だったはずだ。確か今日学校に来てたはずだが……。

真と眼を合わせないように、後ろを伺う。すると、隅のほうに人影発見。よく見ると、その顔には涙と鼻水と真新しい青あざがあった。

「……………」

「ねえねえ孝二君」

「えっ、何？」

蹲っている男子に合掌しつつ、舞のほうに顔を向ける。

「名字何？」

「えっと、次は科学だから理科室行かねえとな」

舞の質問を適当に受け流し、教科書を手に持ち、席を立つ。

「ああ、待って！」

後ろから舞の声が聞こえるが、早足で急ぐ。すると再び殺気が背中を刺す。誰が発しているかは振り返らなくても分かる。

「……………」

疲れる。これって何の罰？ ため息……ひょっとしてこれのせい？ てか、あの兄の方、なんで俺を睨むの。

「……………」
孝二は頭に巻きついている包帯の緩みを手で直す。さて、と呟き、理科室までの廊下を歩いて行った。

日の光と気だるい暑さがますます上がってきてやがる。もう眠気が完全に失せてしまった。さて、授業はどうやって時間を潰そうか……………。

真面目に受ける気ゼロ発言をぶつぶつ言いながら、ふと窓の外を見る。

「……………」

光の強さに僅か眼を細め、そこから見える屋上を見る。

「……………あ、……………いや、まさかな」

端から見ると、おかしな独り言を呟き、軽く息を吐く。

再び頭の包帯のずれを直し、肩を回す。そして歩き始めた。ゆっくりと、ため息混じりに。

「そろそろ包帯変えるか」

と呟きながら。

二章 真夏の夜の夢？

「それは大変だったねえ」

放課後、孝二はいつもの中庭のベンチに腰掛け、火の付いていないタバコをくわえていた。隣には優が片手で携帯電話を操作しながら、孝二の話の話を聞いている。

「んで、その無差別的高性能つばい殺気発射装置さんはいいとして、妹さんのほうはどんなの？ かわいい？」

「おまえにとつてそれしか興味ないんだな」

「当然。男に興味無し。男の喘ぎ声なんて気持ち悪いだけだし」

「……………」

皮肉に言つたつもりが、何とも思つてないようだ。

「そつといえは知ってる？」

優が誰かにメールを打ちながら、問う。

「何が？」

「今日新しく教師が来たんだつて」

打ち終わつたらしく、パタンと携帯を置く。

「新しく来たのは体育とカウンセラーの先生二人だつて。ちなみにどつちも男。片方は美形らしいけど僕は興味無し。あゝあ、綺麗な女教師が来てくれたら燃えるのになあ……………」

「何がだ」

孝二の声に、優は胡散臭い笑みを浮かべ、

「分かつていくせに、カマトトぶつちやつて」

「おまえ一回留置所行つてこい」

「うわ、ひどつ。それが長年付き合つてる友人に言うセリフ？ 轟最近僕に冷たく当たつてない？」

「だつたら、手当たり次第に女と寝るのはやめろ。ただ遊ぶだけならまだしも……………さすがに軽蔑する」

孝二の遠慮無い言葉を聞き、優は笑みを浮かべる。その笑みは先

程までの胡散臭い笑みとは微かに違っていたが、孝二は気が付かなかった。

でもさ、と優が口を開くが、孝二は聞く耳を持たず、発言する。「前から言おうと思ってたけどさ、はっきり言っただけで寝てるんだろ？　ただ、愛情よりも体の欲望優先。飽きたら別の女に彼氏がいろいろがお構いなしに手を出す」

「……………」
優は押し黙っている。孝二は自分の中の、今まで溜まっていた何かを吐き出すように言う。

「くだらない生き方だよ。一種のゲームとでも思っているのか？　おまえはどう思おうが、女も人間だ。商売でやっている奴じゃない限り、体だけ犯されたじゃ、満足いくわけ無いだろ」

「でも、体だけの付き合いを求めてくる女性もいるけどね」

「……………」
孝二が不快の色を顔に浮かべ、優を見る。隣に座る優は先程と同じ笑みを浮かべていた。

「轟、何か嫌なことでもあった？」

「……………」
のんきな声で尋ねる優。その声と笑みを見るとどういう訳か、先程まであった不快感と苛立ちが一瞬にして消え失せた。

「……………」
孝二は、優から目をそらし、軽く息を吐く。

「僕ならいつでも相談に乗るよ」

優はいつもの、のんびりとした感じに言った。なんだか先程まで指摘していた自分が恥ずかしくなった。

何言ってるんだろ、俺は。馬鹿みたいに何も知らない奴が、熱く語って……………。

「いや、悪かったな。愚痴みたいなこと言っちゃまって」と言い、自己嫌悪。脳内で自己批判を開始。

「別に気にしてないよ」。本当のことだし。それに、「

いいこと分かったし、と優は、機嫌良く言う。

いいこと？ と孝二は眉をひそめる。

「何だよ」

「それは」

優は再び口元に胡散臭い笑みを浮かべる。

「轟が千里ちゃんを本気で愛しているってこと」

二章 真夏の夜の夢？

「なっ！」

その優の言葉に、不甲斐無く顔を赤らめてしまった。

「何でそう言う結論に至ってんだよ」

「だって轟、僕の女癖の悪さを怒ったでしょ。つまり本気で一人の女を愛しているが故の発言だと僕は思うんだ。違う？」

「い、いや、違わなくも無いような気がしないわけでも無いような気がするって、何言ってるんだよ俺」

その孝二の慌て様に、優は笑いを堪えきれず、右手で口を覆う。

「ぶっ、くく、はははははははははは。轟の反応最高っ！ クールに決めているようで実は初心なんだね。でも、」

優の笑みが変わる。

「正直言つと羨ましいな、轟が」

「優？」

突然の反応の変化に戸惑う孝二。

「どうしたんだ？」

「……いや、ね、羨ましいな〜って」

優は軽く息を吐く。今までこんな静かな優を見るのは初めてだ。

「……何がだ？」

「僕ね……轟も知っているように、女の子がすごい好き。話していると癒されるっていうかさ。……でもね、僕は女の子が好きでも

……一度も愛したことが無いんだ。何人も女の子と付き合っておいて、たったの一度も……」

「……………」

急なシリアスモード突入に戸惑い、沈黙する。

そんな中、優はポツリと言う。

「さっきね、轟言っただでしょ。生き方最低だって」

「いや、あれは……………」

優は続ける。

「轟はさあ〜、もうちょっと自分に自身を持ったほうがいいよ。自分の論理をべらべら喋ってるのと恥ずかしくなっちゃうのは轟の良いところで悪いところだね。別に構わないと思うよ。でしゃばるのは馬鹿みたいに見えるけど、実際後ろでぶつぶつ未練やら何やらと、ほざくほうがダサイ。かつこわるい」

「……………」

孝二は優の言葉を静かに聞く。

そして一分程沈黙が続いた頃、優はふう、と息を吐き、なんてね、といったもの笑みで言った。

「なに、ちよつとそれっぽいこと言ってみただけ〜。そんなに深く受け止めないでよ」

「あ、ああ……………」

あはは、とむなしく響く優の笑い声。笑い声のはずなのに、その声を聞くと、とんどん気分が沈んでいく。

そついえば放課後は舞に学校を案内する約束をしていたが、すっかり忘れていた。今思い出した。まだ学校にいるだろうか。それとも怒って帰ってしまったのだろうか。

今から探すか、明日謝ろうか……………。

「轟〜」

これからどうしようか考えていると、優が名前を呼ぶ。

「ん、何だ？」

考え事を一時中断し、優に顔を向ける。

「ひよつとしてさ〜」

優は右手の人差し指を、右斜め前方に向ける。

「転校生ってあの人？」

「えっ？」

優の指が指す方向に視線を向ける。そこには、

「うう……………ひどいよお……………」

「だから言っただろ。アレはどうしようもなく馬鹿でボケで屑で阿

呆で能天気で足が短いのろまな頭の悪い最低なゴキブリの卵に集る
蛆虫だと」

七神兄妹だ。何と最悪なタイミング。

「……さすがにそれは言いすぎだと思っただけ……」

「言い過ぎなものか。奴は約束を破った、これは変えようの無い事実だ。いや、もともとから守るつもりなど無かったに違いない。そんな顔をしている。そう、あれは電気の光に集るカナブン以下だ……とん？」

二人の内の一人がこちらに気付き、不愉快極まりないといった感じに顔を歪める。

「何でここに貴様がいる」

「もう、お兄ちゃん！」

二章 真夏の夜の夢？

舞が喧嘩腰の真を諫める。

その二人を見て、優はにっこりと顔に笑みを貼り付け、口を開く。「やあ、初めましてかな？ 君達が噂の転校生だね。どうぞよろしくさん」

優の言葉に真の眉はますますつりあがる。

「そんなことは聞いていない。とっとと失せろと俺は言っている。俺は舞と二人きりという素晴らしすぎるシチュエーションを楽しんでいる最中ということが貴様には分からないのか？」

「？」

突然の真の発言に優は、は？ と呆けた声を出す。

「まったく、ここは人気が無いと聞いたから来たというのに……」

「……？」

真のとんでもない発言。その言葉に優は、微笑みそのままに右手を差し出す。

真は、その右手を訝しげに見る。

「何だ？ 私は貴様と友人関係を築くつもりは毛頭無いぞ」

「いや、さあ……」

優は言った。

「なんか君とはかなり気が合いそうだなあ」と

「ふざけるな」

優の言葉を真はぴしゃりと打ち捨てる。

「貴様のような馬鹿と付き合っていると無駄に知的指数が下がりそうだ」

真はそう言うのと、隣の舞の肩に手を回し、さっさと行くぞ、と小さく言い捨て、去って行った。去り際に舞が、

「ねえ、ところで孝二君、見なかった？」

と尋ねてきた。

「いや、見ないねえ」

優はのんびりと質問に答えた。

その答えに舞は、そう、と小さく呟き、そのまま真と共に視界から遠ざかり、曲がったところで見えなくなった。

「……………ふう……………」

優は疲れを吐き出すように重く息を吐く。そして視線を隅の目立たない場所にひっそりと生えているしなびた木に向ける。

「轟、もう出てきてもいいよ」

優がそう言くと、その木の陰から、孝二が姿を現す。

「もういないか？」

「いないよ。だから恐がらずに出ておいで」

「その言い方やめろ」

口では文句を言いつつも、とりあえず安堵、そして心の中で優に感謝する。

先程、七神兄妹が見えた瞬間にこの木の陰に隠れていたのだ。優が的確に判断してくれて助かった。

「ふう……………」

息を吐きながら、孝二はベンチに倒れこむように体重を乗せる。

「ああ……………やっぱり怒ってたかなあ……………」

先程の舞の表情を思い出す。怒っていた……………と言うより、悲しんでいた、と言うほうが正しいか。むしろ怒っていたのは兄の方だし。

「轟、何があったの？」

やはり予想していた通り、優が先程のことを尋ねてきた。

答えるのもかなり億劫なのだが、適当にはぐらかしても、しつこく聞いてくるだろうから、ため息を吐きつつ、答える。

「ああ、実はさっきの転校生の妹　名前は舞って言うんだが……………」

実はその子に放課後学校を案内するって約束してたんだ。それで

「

「なるほど、轟のことだからすっかり忘れちゃったんだね。かわいい
そ」

「……まあ、そうなんだけどさ」
「あとあれでしょ？ ついさっきそれ思い出したんでしょ？」
「……なんで分かるんだよ」
「轟、僕達何年の付き合いだと思っているの？」
「三年」
「うおっ、速攻即答。気持ちいいけど何か物足りない」
「なんだよ、それ……」
「だって今の轟の答え方って、漫才師で言つと、ボケたらツッコミ
がなんでやねん！ って感じだったよ」
「……よく分かん」
「そう、じゃあ北条時宗に例えてみよう」
「突然そっちに飛んだ理由が俺は知りたい」

二章 真夏の夜の夢？

「人は理解しないと知識として得ることは出来ないんだよ。だから解説、解説。えくと、元寇は知っているよね？ フビライが博多湾に攻めてきたやつ」

「それぐらい小学生でも分かる」

「うん。じゃ、執権だった北条さんが一二七五年に、元からの使者の杜世忠さんを殺して、その首を相手に送ったって話は知ってる？」

「……？ いや、殺したのは知ってるが、その首を送ったってのは初耳。本当か？」

「さあ？ 僕もなんとなく聞いたことがあるような気がしただけ。それより大事なのは北条さんの行動なの。絶対に勝ち目は無い。それなのに北条さんは戦うことを決意した。そう、皆の期待みたいなのをぶち壊したんだ。これって漫才とかでも大事だよ。あらゆる事柄の流れに従わず、常に先入観をぶち壊す。そうすることでその人は真の漫才師となるんだよ」

「……漫才師限定かよ。てか、おまえの意見で言つと北条時宗は真の漫才師になりたくて使者を殺したってことか？」

「そのとおり！」

「んな訳あるか」

孝二は軽く息を吐き、くわえていたタバコを吐き捨てる。

「明らかに途中で話の論点がずれてるだろ」

「どれくらい？」

「……………」

優の眼を見る。明らかに何か変わった答えを求めている。考える。そして答えを導き出した。

「……えっと、三流会社の社長のカツラ並」

「……う、うん……………」

優はやや苦笑いを口に浮かべ、唸る。

「その、反応に困るって感じの反応はやめてくれ」

「まあ、人生、考えかたは人それぞれ。大事なのは、自分を極めること……って感じていい？」

「うまくはぐらかしてねえか？」

「気のせい気のせい。ところであのロリロリの妹ちゃんに謝りに行かなくていいの？」

「……ロリロリって。いや、まあ、行かないといけないんだろうけど……あの兄貴のほうがどうも苦手なんだよなあ……」

「人生チャレンジ人間性欲って言うでしょ？」

「後半アウト」

「とにかく苦手だからって敬遠しちゃいけないよ。たいていの苦手って慣れてないだけっていうのが多いんだから。僕だって初めてのときは、終わるのが早すぎるって女の子に怒られたけど、今ではもう許してって言われるほどなんだからあゝ」

「……………」

考二は大きくため息を吐く。

「まあ、俺、これから用事があるからさ。明日謝ることにするよ」

「そうなんだ。それじゃあまた明日〜」

優に手を振り、轟は中庭から出た。

学校を出て、歩道を歩く。太陽は傾き、昼ごろに比べると、だいぶ涼しくなってきた。

「ふん、ふん」

轟は鼻歌を歌いながら歩く。生暖かい風が頬を撫でる。その口元は少し緩んでいた。

二章 真夏の夜の夢？

「今回の指揮は貴様か？」

とある一室。その教室にあるソファアに座りこんでいる一人の男。「残念だけど、僕じゃないんだよねえ。やりたいのは山々だけど、さすがに上に目をつけられちゃって」

その男の前に、机にもたれかかるもう一人の男がいた。足元まで覆う長いベージュのコートを纏っている。

「それじゃあ今回は誰なんだ？ まさか……あいつか？」

ソファアに座る男は、苦々しげな顔を作る。

「そう、君の想像通り。今回の指揮は杉山竜君に任せてあるよ」

「……………」

ソファアの男は沈黙する。

「やっぱり後輩に命令されるのは嫌かい？ 真」

「……………私も奴の実力は買っているがな」

ソファアに座る男 真は、小さくため息を吐いた。

「しょうがないかな？ 真は人を威圧しすぎるから、指揮には向いてないし、舞ちゃんはまだ難しいだろうし。あとペディモね」

「ペディだと？」

真は眉をひそめる。

「教官も入っているのか？」

「うん。なんか今回はちょっとやばいらしいからね。率先して参加してくれただ」

「……………そうか、奴が来ているのか」

「あれ？ うれしくないのかな？」

コートの男の言葉に、真は眉をさらにひそめる。

「うれしい？ この私が？」

その口元に、不気味に歪んだ笑みを浮かべる。

「訓練生のとき、一週間飲まず食わずで、トレーニングをやらされ、

やっとな飯と思えば、プロテインと焼いた虫を食わされ、全身鎧を着せられ、太平洋のど真ん中に放り込まれ、果ては素手で空腹のライオンと闘わされた……。そんな私がうれいしと？ 面白い冗談だな……」

「うん、ペディさん、そんなことしてたのかあ。どうりで毎月訴えられてるわけだ……」

コートの男は、ところで、と前置きして言葉を続ける。

「今日見た感じではどうだった？ 怪しい人いた？」

「ん？ ああ……」

真は息を吐きながら答える。

「今のところ、一人いるな」

「どんな子？」

「教室の、私の前に座っている」

真は自分の頭を指さす。

「孝二とかいう、頭に包帯を巻いている奴だ」

孝二は右手に果物の入った買い物袋を提げ、病院の廊下を歩いていた。病院独特の消毒液のような匂いは、あまり好きじゃないが、クーラーが効いているので居心地は悪くない。

「小遣いの残りが千円になっちまったよ……。まあ、いいか。覚悟したことだ」

そんなことを呟きながら、階段を上る。さらに少し歩いたところで、目当ての病室にたどりついた。

「ういっす、千里ー。元気かー」

孝二はそう言って、ベッドの横にある丸椅子に腰かけた。

「うん、いい感じ。もうすぐ退院出来るって」

そう言って、ベッドに寝そべる少女 千里は微笑んだ。

「そうなんだ。優が、退院したら皆でツーリング行こうって言ったぞ」

「おお、いいじゃん。あつついからさ、海行こうよ」

千里は、孝二の持ってきたリングを手に取り、それにかじりついた。

彼女の名前は木下千里。ショートカットの茶色がかった髪と、やつりあがった目が印象的な少女だ。優いわく、小悪魔だとか。

「それでさ、優の奴、制服がボロボロになってたんだよ」

「あいつ、相変わらず馬鹿やってるのね。そろそろ殺されちゃうんじゃない？」

「かもな。女たらし、ここに眠るって感じが」

二人してひどいことを言いながら、声をあげて笑う。

「ところで……今ちよつと見えたんだけど あんた、まだ煙草止めてなかったの？」

千里がやや目を細めて言う。

「え、いや……これは」

孝二は少し顔を引きつらせる。

「いや、一応止めたんだけどさ。どうも未練がましく、煙草くわえちゃうんだよな……。あ、もちろん火は付けないよ？」

「当たり前。私だって、退屈でイライラするけど、煙草我慢してるんだから」

「うん……ごめん」

孝二はややうつむき気味に答えた。病室内に沈黙が下りる。

「……………」

千里は食べかけのリンゴをテーブルの上に置き、袖で口元を拭う。

「ねえ、孝二……………」

「うん？」

千里は孝二から一瞬視線を外し、ゆっくりと口を開いた。

「頭の包帯……………まだ取れないの……………？」

「……………ああ、これ？」

二章 真夏の夜の夢？

孝二は自分の頭に巻きつく包帯を指さし、大丈夫、と前置きして言葉を紡ぐ。

「怪我はもう治っているんだ。ただ、ちょっと肌が弱いというか、クセが付いてるといっつか……。と、とにかく、これは全然関係ないから」

「そうなの？」

千里は目を細めて、孝二を見る。この仕草は孝二を疑っているという事だ。

「本当だぞ？ それじゃあ……。見る？」

孝二はそう言うやいなや、頭の包帯を一気に取り去った。

「！」

「……あ、本当だ。綺麗に治ってる」

嫌だ、助けて！ 嫌っ！

「それならもう包帯巻かなくてもいいんじゃない？」

孝二、逃げてよ。何で逃げてくれないの！？

「孝二……？」

お願い、死なないで！ 誰かつ！ 優……？ 早く何とかして！

「どっしたの、顔色悪いよ？」

「っ……！」

孝二は右手に握る包帯を、自分の額に押し付けた。

「あ、ああ、何でもないよ。ちょっと俺、用事思い出したからまた明日！」

孝二は早口でそう言うなり立ち上がり、早足で病室を出た。背後から千里の声が聞こえてくるが、孝二は振り向きもしなかった。

「くそ……。まだ消えてなかったのか……」

廊下の壁にもたれかかり、自分の掌を見る。汗でびっしょりと濡れていた。

孝二はよれよれの包帯を、頭に巻きつける。深く息を吐く。両手がかすかに震えている。孝二はポケットから煙草の箱を取り出し、急いで口にくわえた。

「火……。くそ、火が……」

胸に手をやり、何度も深呼吸を繰り返す。何度も自分に、落ち着けと呟く。

やがて心臓の鼓動も静まっていき、両手の震えも収まってきた。

「……………」

孝二は深く息を吐く。そして自分の口にくわえられた、煙草を見る。

「……しばらく離れられそうにないよな……」

そう言うなり、顔をしかめて、自分の額に手をやった。

「くそ……。何でなんだよ。もうあれから結構経つのに……。怪我也治つたのに……。何で消えてくれないんだよ……！」

孝二は額に爪を立て、憎々しげにそう呟いた。ふと外を見る。日が傾き、外はもう暗くなり始めていた。

「……………」

孝二は病院の外へと足を向けた。とにかく、今すぐこの病院から抜け出したかった。

「くそ……。何で……。何で……」

孝二は無意識に何度もそう呟いていた。

「はい。手下は順調に集まっています。校内の半分は既に私の部下です」

暗闇の中、携帯電話を片手に会話をする一人の男。

「ええ、大丈夫ですよ。裏でどんな組織が動いていると　私の能力の前では、赤子と同じです」

ククツと男は笑う。

「どうせなら、その組織の奴らも、私の部下にして　内部から崩壊させるというのも良いのではないのでしょうか？　え、ですが……はい、分かりました」

その後、男は二三会話をして、電話を切った。

「……………」

男は通話の切れた携帯電話を、静かに見つめる。しばらくしてから、男は携帯電話をポケットに仕舞い、苛立たしげに舌打ちをした。「奴らをなめるな？　マスターは俺を馬鹿にしているのか？　俺の無敵の能力を」

男の周りには、十人ほどの人影が控えていた。男女様々だが、皆一様にうつろな目をしていた。

「びびりやがって。見てろ」

男は口元を歪め、笑みの形を作る。

「この俺の力　『皇帝』は無敵だったこと、改めて証明してやる」
男の乾いた笑い声上がる。だが周りの人影は沈黙したままだ。

「　笑えよ、お前ら」

男の言葉と同時に、周りから笑い声上がる。それは徐々に徐々に大きくなっていった。

「そうだ、笑え。屑どもが俺にひれ伏していくざまを」

闇の静けさをかき消す、その笑い声のコーラスはいつまでも鳴り響いていた。

二章 真夏の夜の夢？

彼は寝そべって、満面の星空が眺めていた。

俺は何で空を見上げているんだろう。

轟！ 目を閉じちゃダメだよ！ 絶対！

顔を前に向けると、必死な形相の優がいた。

「……優？ どうしたんだ？」

医療班を呼んだよ。もうすぐ来るからしいから。

その優のとなりに見知らぬ男がいた。顔はよく見えないが、足元まで覆う、長いベージュのコートを着ていた。

応急処置はしたからね。あとはこの子の体力次第かな。

「……？ 何の話をしているんだ？」

孝二はそう尋ねるが、彼らは答えない。すぐ近くの優は、今にも泣き出しそうな顔をして、こちらを見ている。優のこんな顔は見たことがない。

僕がいながら……轟と千里ちゃんをこんな目に……。

優は唇をかみしめ、両手のこぶしを震わせていた。

君のせいじゃないよ。

コートの男が、優の肩に手を置き、静かに言葉を投げかける。

力だよ。全てはそれが原因なんだ。簡単に 努力も無く、

簡単に手に入る巨大な力は、必ず歪むんだ。本来、力を鍛えると同時に、それを抑える心も鍛えないといけない。それを忘れてしまえば……歪む。だから、こんな力は、この世にあってはいけないんだ。人の心は……人が思うほど強くないんだ。

「なあ、さつきから何の話をしているんだ？」

そう言つて、孝二は起き上がるうとする。

「ん？ あれ……？」

一瞬視線をさまよわせ、再び起き上がるうとする。だが、体は一
向に動かない。

「……………？ 何で？」

首から上は動くようだ。孝二は首を曲げて、自分の体を見る。腹部に一本のナイフが突き立てられていた。

「……………え……………？」

途端、頭から血の気が引く。

「え……………何で……………？」

突然のことに、間の抜けた言葉が吐き出された。何でと何度も呟き、視線をさまよわせる。

医療班が到着したみたいだね。

コートの男が振り返りながら言う。見ると、救急車らしき車が見える。

早く、こつちだよ！ 轟、千里ちゃん、死なないでよ！

「優……………？ 千里……………？」

白衣を着た男たちが、担架を持って、こちらに駆けてくる。男たちは孝二を素早く担架に乗せると、急いで車のほうへと運ぶ。

「千里？ 千里、どこだ？ どこにいるんだ？」

孝二は担架の上で叫ぶ。そして首を必死にめぐらせ、千里の姿を探す。

車に乗せられ、体を固定される。それほど時を置かずして、孝二の隣にもう一つ、人を乗せた担架が運び込まれる。

「……………千里？」

隣の担架には千里が乗せられていた。意識が無いのか、目を閉じている。

「千里！ 大丈夫か！？」

孝二は叫ぶが、何の反応も返ってこない。

かわいそうなことをしちゃったね。

視界が遮られる。視線を上げると、コートの男が、孝二と千里の間に立っていた。車内に振動が走り、車が発進する。

二章 真夏の夜の夢？

ごめんよ。犠牲が必要なのは分かっていたんだ。しょうがないなんて言葉を使う気はないよ。僕を 好きなだけ恨んでくれ。コートの男は、こちらに体を向ける。その手には白く、細長い物体が握られていた。

ごめんよ、孝二君。あの子が知ったら怒るだろうけど。

「……？」

孝二は眉をひそめて、その手に持つ物を凝視する。徐々にそれは孝二の額へと近づけられる。

「……何をやる気だ？」

孝二は逃れようとするが、体はもちろん、首すら動かなくなっていた。

「……！」

やめろ！ 何をやる！？

必死に叫ぶが、声が出ない。徐々に物体は近づく。

やがて、その物体が額に触れた。だが、その物体の進行は止まらず、ゆっくりと額の中へと侵入していく。

「……！」

声にならない叫び声をあげていた。音も立てず、物体は額に入り込んでくる。コートの男は悲しそうに微笑を浮かべる。

本当にごめんね。君も実験体になってもらうよ。

「うあああああ……！」

孝二は叫び声をあげて、起き上がった。心臓が激しく脈打っている。全身が汗で濡れていた。

孝二は荒い呼吸をしながら、辺りを見回す。見慣れた机や棚。千里や優と撮った写真が飾られている。

そして寝間着を着た自分とベッドに視線を合わせたところで、こ

こが自分の部屋だと気付く。

「夢……か」

孝二は大きく息を吐き、自分の額に手をやる。

「……最近やっと見なくなったと思ったのに」

机に放られた煙草の箱を手に取る。だが少し考え、そのまま元に戻した。

「実験体……」

先ほどの夢を思い出し、孝二は額をさすりながら、体を震わせる。

「忘れる……忘れるんだ……！」

ふとんを頭からかぶり、目をつむる。その夜、孝二は眠ることが出来ず、そのまま朝を迎えることになった。

三章 ピンクなアミーゴ？

そこは、夏だというのに、ひんやりとした空気が廊下を満たしていた。孝二は今、保健室の隣にある教室の前にいた。扉には、『カウセリングルーム』と書かれた紙が、テープで貼り付けられている。

「……………」
孝二は、その文字を胡散臭げに眺める。

「……………あんまりこういうところ来なくなかったな」
そう言っつて、大きなため息を吐く。

孝二はしばらくの間、その扉を眺めていた。そして、朝のホームルームが始まるまで三十分をきったところで、覚悟を決めた。

「失礼します」
そう言っつて、扉を二度叩いた。

中から、どうぞと帰ってきた。孝二は扉を開き、軽く頭を下げて中に入った。

「やあ、おはよう。何か悩み事かな？」
クーラーの効いた、小ざつぱりとした教室内。そこに、一人用のソファアに腰掛けている男がいた。

まるで寝起きのようなボサボサの髪と、しわだらけのスーツ。それだけでも暑そうなのに、その上から足元まで覆う、長いベージュのコートを着ている。人の良さそうな顔と笑みを孝二に向けていた。

「あ、初めまして……………」
「そこまで硬くならなくてもいいよ。友達と思ってね。ささ、座つて」

コートの男は、向かいの二人用ソファアを手で示す。

「あ、はい。失礼します」

孝二は一礼してソファアに座った。

「それで、今日はどうしたのかな？ ああ、名前はいいよ。ここは

心の悩みを聞くとこころ。満足したなら、もう来なくてもいいし、また来たいなら、いつでも来るといい」

「は、はあ……」

孝二は視線をさまよわせ、一つ一つ言葉を選びながら、尋ねた。

「その、何ていうか……。トラウマ……。というかフラッシュバック」？

コートの男は両手を組んで、孝二の話聞く。

「その、ですね。昔すっごい嫌なことがあったんですよ。すぐに記憶から消してしまいたいような」

コートの男は静かに頷いている。

三章 ピンクなアミーゴ？

「しばらくすると、忘れられるんですが……。いつも、ある拍子に思い出してしまうんです。その拍子というのが」

孝二は、ためらいがちに手を持ち上げ、自分の頭に巻かれた包帯をさする。

「この 包帯なんです。いや、包帯というより 額です。額を隠しないとダメなんです」

孝二の手が震え始め、額に爪を立てる。

「額を、何かで覆ってないと 見えてしまうんです！ あの時の光景が！ 思い出すなんてものじゃない。ありありと 目の前に浮かび上がるんです！ 痛い、痛い！ 血が、血があ」

気付いたとき、コートの男が、孝二の両肩に手を置いていた。

「 ゆっくりと、大きく。呼吸をするんだ」

コートの男の顔が微笑む。孝二は言われたとおりに、深呼吸をする。先ほどまでの取り乱し方が嘘のように消えていく。

「落ち着いたかい？」

コートの男は、そう言うと、最初に座っていたソファアに腰掛けた。

「あ、すみません……。取り乱しちゃって」

「……君は」

孝二の言葉を遮るように、コートの男は言葉を紡ぐ。

「どうやら、あまり外を見ていないみたいだね」

「え？」

コートの男は言葉を続ける。

「内側、内面。自分、過去。ふむ、過大評価も過小評価もせず、冷静に見ているね。普通はおぼろげなんだけど、しっかりと見えている。君の性格が合っているんだね」

「……………」

「君は夜空を見上げることはあるかい？ 星は好きかい？」

「え、星 ですか？」

突然の質問に、孝二は戸惑う。

「いや、あんまりないと思いますけど……。何か関係あるんですか？」

「あるよ。今日は晴れているから、今夜星空を見上げてみるといいよ。ただ見るだけじゃない。心の眼で見るんだ」

「心の 眼？」

コートの男は立ち上がり、孝二のもとへ詰め寄る。

「ゆっくりと深呼吸するんだよ。一つ一つ。丁寧に」

そう言って、孝二の額へと手を伸ばす。

「怖がらなくてもいいよ。きっと もうこれは必要ないと思うから」

「え ？」

コートの男の手が、孝二の額に触れる。

「想像力はあるほうかい？ いいかい？ 自分の額に イメージ

だよ？ 第三の眼があると思うんだ」

「第三の……眼」

孝二はイメージしやすいように目を閉じる。

「その眼はね、あらゆるものを見ることが出来るんだ。人も物も過去も未来も」

イメージだよと、コートの男は再度呟く。

三章 ピンクなアミーゴ？

「君にとって、忘れたいことがある。だけどなかなか忘れられない。目の前に浮かび上がってくる。どうしてか？ 君は この眼を、そちらに向けてしまうんだ。無意識にね。それじゃあどうすればいいの？ 簡単だよ」

眼を閉じればいいんだ。

「イメージするんだよ。額にある第三の眼を ゆっくりと閉じるんだ。ゆっくりと 眠りに誘われるように、ゆっくりと。そうすれば もう君は、過去を見ることはなくなるだろう。夢の中では思い出してしまうかもしれないけど、いずれ時間が経てば見なくなるだろう。君に」

もうこれはいらないよ。

コートの中の手で、ゆっくりと包帯が外されていく。ものの数秒で、包帯は全て取り払われた。

「どうだい？ まだ 見えるかい？」

「あ……」

孝二は呆然とした顔で、自分の額に触れる。

「……見えない」

「それはよかった。君が楽になれて本当によかったよ」

コートの男は優しい笑みを、こちらに向けた。

「ああ、ありがとうございます！」

孝二は立ち上がって、コートの男の手をつかんだ。今にも涙を流しそうだ。そんな孝二の様子にコートの男は、悲しげに目を細める。「本当に苦しんでいたんだね……」

よかったよよかったと何度も繰り返して、孝二の肩を軽く叩く。

「さあ、そろそろホームルームが始まっちゃうよ。また来たくなくなったら、いつでも来ていいよ」

孝二は再度頭を下げ、お礼の言葉を何度も言った。

「本当にありがとございました！」

「ほら、お礼はいいから急いで。時計を見てもらんよ」

孝二は壁に掛けられていた時計に目をやる。

「げっ!？」

ホームルームまで三分をきっていた。

「し、失礼しました！」

そう言つと、孝二は急いで扉に向かう。

「あ、そうだ」

孝二はそう言つて、振り返る。

「先生の名前、何て言つんですか？」

コートの男は、ソファアに座りながら答えた。

「僕の名前かい？ 僕は緋川翔。気軽に翔先生って呼んでもいいよ」

そう言つて、コートの男 緋川は微笑んだ。

孝二は礼を言つて、教室を出た。

廊下を走り、階段を一段抜かしで上がっていく。

カウンセラーか……。

孝二は、先ほどの自分の反応を思い出していた。

意外と馬鹿に出来ないもんだな……。

チャイムが鳴った。暑さと寝不足で、気分が悪いが、その足取りは軽かった。

三章 ピンクなアミーゴ？

ホームルームにはぎりぎり間に合った。そして教室に入るなり、とてつもなく巨大で鋭い殺気が孝二を貫いた。

発生源は見なくても分かる。真だ。

「……………」

孝二は一瞬ためらうが、自分の席に着くため、恐る恐るといった様子で、近付いていく。

「貴様」

真が口を開き、孝二へと向けられた眼をさらに鋭くさせる。孝二は思わず立ち止まる。

「純粹無垢で天使のような いや、まさに天使そのものといったもい舞との約束を平気で破っておきながら、よくのうのうと遅刻間際に学校に来れたものだ」

「……………」

孝二はうんざりしたように、ため息を吐く。そして隣で同じように、ため息を吐いている舞に、言葉を投げかける。

「その、昨日はごめん。学校案内できなくて。今日は絶対に忘れな
いから」

「…………… あ、うん。大丈夫。気にしてない。でも今日は用事があるの」

「…………… そうか。本当にごめん」

孝二は謝りながら席に座った。

「…………… こともあるだろう。だが、朝一番で粗品と土下座を持って、謝罪するならまだしも、貴様は 私を無視したな……………」

背後からの殺気。だが二日目になると、だいぶ慣れてきた。

「お兄ちゃんの相手するの、大変でしょ？ 本当にいつもこうなんだから」

隣の舞が、声をかけてきた。孝二は首を大きく縦に振り、同意する。

「あ、包帯取れたんだね。けが治ったんだ」

「ああ、これ？ うん、今朝とれたんだ」

そう言う孝二の口元が自然と緩む。ずっとトラウマとして持っていたものが消えうせたのだ。

「足の短い、平凡面のくせに、よく私を無視出来たものだ」

「……………」

孝二は、背後からの声に、眉を一気にひそめる。真の殺気に慣れてくると、だんだんとその言動に腹が立ってきた。

「あんたなあ……………いい加減にしろよ。いつまでも調子に乗っていると

」

孝二はそう言いながら、後ろを振り返る。

真は孝二の顔を確認すると、口元をにやりと歪ませる。

「ほう、良い面構えだ」

真は身を乗り出し、孝二に顔を近づける。

三章 ピンクなアミーゴ？

「……？」

孝二は眉をひそめたまま、真を見返す。真は、顔を孝二の耳元まで近づけて、小さい声で言った。

「良かったな。目の閉じ方が分かって。翔に教わったのか？」

「……！」

孝二は目を見開く。真は言葉を続ける。

「貴様も災難だったな。だが、半分は貴様の性分のせいだ。うじうじと自分ばかり見ていたから、トラウマなんぞ抱え込むのだ。外と中はファイファイファイ。よく覚えておけ。自分自身とすら、うまく付き合えない奴は、成長出来ん。能力の有無は関係ない」

「……能力？」

「……何だ？ 翔から聞いていないのか？ たく、あいつは何を考えているんだか。まあ、確かに貴様はまだ役不足だ。面構えは少しマシになったが、根性がまだまだだ」

「何の話をしているんだ……？」

真は質問には答えず、そのまま椅子にもたれかかった。

「教えてやらん。貴様は舞を裏切り、私を無視したからな」

「……」

「……」

孝二は、さらに問いただそうとするが、教師が来てしまい、タイミングを逸する。

何で、緋川先生の言ったことを、こいつが知ってるんだ？

孝二は考えるが、答えは出ない。

実験体……。

ふいに浮かんだ言葉。

助け！！ 血 が、や、やめ、ろ 優！！ 君は「どうして……！?? コートの！ あ、これ は。君「恨！ 何で？」「君も実験体になってもらうよ」「やめ！ ああ、ああああああああ！！」

「！！」
孝二は右手を額に押し付ける。そして、カウンセリングで言われたことをゆっくりと思い出し、イメージをしていく。

「危ないな……。閉じろ、閉じるんだ」
孝二はゆっくりと息を吐き出す。だいぶ治まってきた。

孝二は窓の外に顔を向ける。雲ひとつない青空が広がっていた。

「……………」
孝二は気だるげに、大きなため息を吐いた。

三章 ピンクなアミーゴ？

「暑い……」

中庭のベンチ。孝二は、火の付いてない煙草をくわえて、そこに座っていた。ちなみに孝二のクラスは今、授業中だ。サボったのだ。いつものことだが、さすがに中庭に人気はない。

「……………」

孝二は額をさすりながら、ぼーっと空を眺めていた。

想像力はあるほうかい？ いいかい？ 自分の額に イメージだよ？ 第三の眼があると思うんだ。

その眼はね、あらゆるものを見ることが出来るんだ。人も物も過去も未来も。

「過去も 未来も……………」

孝二は目を閉じる。

未来。未来か……。外。自分の外。

孝二は、自分の額の眼が開いていくようなイメージをする。

未来。未来。先。人生の先。

「あなたが轟孝二君ですね？」

「ん？」

突然名前を呼ばれて、孝二は思考を中止して、目をあける。

目の前に、巨大なピンクの物体が現れた。

「ピンクー！？」

「ピンクではありません。人間です」

そのピンクの物体は喋った。

「ピンクが喋った！？」

「ピンクが喋ったわけではありません。人間が喋ったのです」
ピンクの物体はさらに喋る。

よくよく観察すると、それは確かに人間だった。

「……！！」

孝二は目を見開いたまま、固まっていた。

その物体はピンクだ。人間と分かった今でも、それを言葉で表せと言われたら、ピンクしか言葉が無い。

体は大柄。何故かぴっぴっちのピンクのボディースーツを着ている。身長は百八十近くあるだろう。そして、まるで相撲取りのような真ん丸な体形をしている。顔に、ふちがピンク色の、星型のサングラスをつけており、ピンク色のちょび髭を生やしている。そして最も目を引くのが、髪型だ。アフロ。しかもかなりでかい。無論それもピンク。

「いけませんね。あなた体育をサボりましたね。今からでもいいから、参加しなさい」

そのピンクが喋るたびに、お腹とアフロがゆさゆさと揺れる。

「……あの、あなた誰ですか？」

「おお、自己紹介が遅れましたね」

ピンクは、両手を腰に当て、胸を張って答えた。

「私は、新しくこの学校の体育教師としてやってきた者です。名前はペディキュア・ペープと申します。アメリカ人です」

「ペ、ペ、ペで……くあ……」

「ペディキュア・ペープです。ペディ先生とお呼びください」

ピンク、ペディはそう名乗った。

「ペ、ペディ先生ですか!？」

「そうです。ではこんなものくわえていないで、一緒に体育で汗を流しましょう」

ペディはそう言つて、孝二のくわえている煙草を取り上げた。

「健全な魂は健全な肉体に宿るのです。さあ、レッツランニング!」

ペディはそう言うなり、その場で行進を始める。お腹とアフロが

ゆさゆさと揺れる。

「あ、あのすみません、先生！」

「何でしょうか？ 体操服を忘れたのですか？ それなら、この私と同じボディースーツを」

「違いますっ！！ ちょっと気分が悪いので、保健室に行ってきた！ 授業は休みます！」

孝二は早口でそう言うなり、逃げるようにその場から立ち去ろうとする。

「むむ、気分が悪い？ それはいけませんね。実は私、最近ペディーズブードキャンプなるものを考案しましてね。インフルエンザも気合で吹き飛ばせが、モットーなのですよ。どうでしょう。お試しになっっては」

ペデイの言葉を最後まで聞かず、孝二はその場から全力でダッシュした。背後から「素晴らしい踏み込みです！」と声が飛んでくる。

「……何なんだ、あのピンクは」

あれに関わるとやばい。孝二はそう直感した。

三章 ピンクなアミーゴ？

相変わらず、ひんやりとした空気が廊下を満たしていた。

「……先生いるかな？」

保健室を通り過ぎ、カウンセリングルームと書かれた教室の前に立つ。あのピンクには保健室に行くと言ったが、どうも入りづらいのでこちらを選んだのだ。

「失礼します」

孝二はそう言っ、扉を叩く。だがしばらく待っても返事は返ってこなかった。孝二は扉に手をかけるが、鍵がかかっていた。

「……いないのか？」

孝二は残念そうに息を吐く。そして、さてどうしようかと、頭をかか。

「……さすがにあのピンクは授業に戻っただろうから、中庭で時間つぶすか……」

孝二はそう言いながら踵を返し、保健室の前を通り過ぎようとする。

その時、突然保健室の扉が開いた。

「うおー！」

あまりにもタイミングが良かったので、思わず驚きの声が漏れる。

「おっと、びつくりさせてしまったか」

扉を開けて現れた人影は、落ち着いた声でそう言った。

「あ、ども。失礼します」

孝二は早口にそう言っ、その場から立ち去ろうとする。

「まあ、待て少年。どうせサボりだろう？」

その人物は孝二の手首をつかむと、にやりと口元を歪ませる。

「……え、あ、えっと」

身動きの取れなくなつた孝二は、しどろもどろになりながら、その人物に目をやる。

その人物は白衣を着た女性だった。綺麗な黒髪が腰元まで伸びている。何となく真を思い出した。前髪は眉のラインで切りそろえてあり、細く、鋭い眼が孝二をとらえていた。見た目は若く、年は二十後半か、行つたとしても三十前半だろう。かすかに煙草の匂いがある。

「安心しろ、少年。別に説教しようつてわけじゃない。何なら寄つていく？ 暇だったの」

「は、はあ……」

「若いうちは好きなことを好きなだけやれ。後悔するのも未来の楽しみの一つだ」

さあ、入れと腕を引っ張られ、孝二はされるがまま保健室の扉をくぐる。

「先生、何か用事があるんじゃないんですか？」

無理やり丸椅子に座らされながら、孝二は尋ねる。

「用事？ そんなものは無い。私はずっと暇さ。扉を開けたのは人の気配がしたからさ」

女性はそう言いながら、白衣の中から煙草を取り出し、口にくわえた。

「……先生。この学校、校内全面禁煙ですよ」

「知ってる。ばれなきやいいのよ。少年もどうだい？」

そう言つて、孝二に煙草の箱を差し出す。

「……俺、煙草止めたんです」

「それは残念ね。若いうちから我慢するなんて、体に良くないわよ？」

女性は煙草に火を付け、ゆっくりと煙を吐き出す。孝二は胡散臭げに女性を見る。白衣の胸元に名前が書かれたプレートが取り付けられていた。そこには『杉山結香』と書かれていた。

「普通は我慢するほうを促すと思うんですが……」

「そうやって我慢するほうがダメなのよ。たいして我慢強くないくせに、我慢ばかりやってる奴が犯罪なんか犯すのよ」

女性 結香は、煙を吐き出しながら、そう言った。

「そう、なんですかね……？」

「そう、そう。せっかくの人生なんだ。世界中のあらゆる娯楽をたっぷりと楽しまないとね。私は正直、アホみたいにホイホイ自殺する、最近のガキが理解できないよ。知ってる？ 今の日本の、月の自殺者って、イラク戦争のアメリカ兵、月の戦死者の十倍よ？ 戦争やってる国より死人が多いってどういうことだ」

そう言って、結香はケラケラと笑う。

三章 ピンクなアミーゴ？

「だから、少年。我慢はするな。反則上等、違反上等だ。ああ、だからと言って、盗みやらレイプやらはするなよ。自分の楽しみのために人の楽しみを奪うなんて最低だ。違法を楽しみつつ、必ずどこかで自分を律する。それが上等な人間つてもんだ」

「はあ、なるほど……」

孝二は生返事をしながら、この場から立ち去るアイデアを考えていた。結香は、なおも言葉を続ける。

「薬なんかもさ。やりたい奴は勝手にやらせてりゃいいのよ。だが一つ言っておこう、少年。薬は人生のおいての最後の楽しみ方だ。依存性の強さは様々だが、どれも確実に寿命を縮める。例外はない。自分の命を材料に快楽を作るんだ。人生の楽しみが無くなった奴が最後に手を出すのが薬だからね。ある意味、やたらとのんきな自殺つてところかね。あらら、最初言ったことと矛盾しちゃったよ」

結香は孝二の肩をバシバシと叩きながら、大声で笑う。そのテンションに、もしかすると少し酒が入ってるかもしれないと思った。

「……帰っていいですか？」

さすがにうんざりとしてきたので、不躰に尋ねる。

「帰る？ サボリ少年がどこに帰るのさ。お姉さんの話退屈だったか？ それじゃあ今度は少年の話を聞こう。彼女はいるか？ もうやったか？」

返す気はさらさら無いようだ。

「……一応彼女はいますけど」

「外に出せばいいだの、安全日だのは都市伝説だ。しっかりコンドーム使え。財布に入れると金が貯まるとか言う馬鹿がいるが、そんなところに入れていると、傷んで穴開くからマネするなよ。付ける時に爪立てても穴開くから注意だ」

「……………」

話題が下ネタにシフトしてしまった。

「あの、先生。そう言う話はちよつと……」

「何だ、まだやってないのか。根性無いな。私が学生の時に付き合った男は、告白の初日に私をホテルに連れ込んだぞ」

「一緒にしないでください」

「だがな。その男、プレイボーイ気取つてたくせに、いざ本番になると、緊張したのか全然たないんだよ。そう、童貞だったんだよ。最悪だったわよ。ムカついたから、そいつの股間、ライターであぶつて、ケツ蹴りあげて、裸のまま部屋から追い出してやったよ。あの時のアイツの情けない声！ 今思い出しても笑える！」

結香は下品に声を張り上げて笑う。

孝二は結香から視線を外し、教室内をさまよわせる。デスクの隅にビールの缶が五本転がっているのを発見した。

「やっぱり酒飲んでたか……。てか、朝からビール五本も飲むなんて、とんでもない教師だな……」

結香の話を適当に聞き流しながら、そんなことを考える。

「少年」

言葉を投げかけられ、視線を前に戻すと、目の前に結香の顔があった。

「！！！」

一瞬肩を震わせた。結香が身を乗り出し、孝二のすぐ目の前まで顔を近付けていた。酒の匂いがした。

「な、何ですか……？」

孝二はそう言いながら、距離を取ろうとするが、結香の腕が伸びて、孝二の頭をわしづかみにする。

「少年」。実は私はあんたのことを知ってるんだ。緋川から聞いてたんだ。名前は轟孝二だったよな？」

結香はニタリと笑いながら煙を吐き出す。煙草の匂いが鼻をさす。

「緋川先生から……？」

「ああ、そうさ。仮合格だと。それで私に最終試験をお願いだって

「さ」

「え」

疑問に口を開こうとするが、その口が結香の指で塞がれる。

「質問する必要はないさ。私が見たところ、あんたは悪人じゃなさそうだ。多分合格できるだろ」

そう言っつて、結香は髪をかきあげる。煙草を手に取り、灰皿に押し当てる。

「合格したら速攻で教えてやる。あんたが持つ疑問を全てね。一瞬で終わるからね……妙な気を起こすんじゃないよ？」

結香は手を伸ばし、孝二の顎をつかむ。頭と顎。孝二の顔は完全に固定された。

「えっと　あんた確か『星』だったよな？」

「……は？」

「好都合だね。ほら　見えるかい？」

結香はそう言っつて、舌を出した。

「……？」

孝二はその舌に目をやる。そして途端に眉をひそめた。

結香の舌には　奇妙な　刺青のような紋様が描かれていた。

舌の中心に『？』と描かれており、その数字を囲むように、『ごつごつ』とした木の実のようなものがいくつも描かれている。

「何なんですか、それ……？」

「刻印。戦士の証でもあり、奴隷の証でもある」

結香は孝二の顎を持ち上げ、若干目を細める。

「ナンバー2。この刻印の名は『女教皇』」

「……？」

「少年。あんたの彼女には、ちょっと悪いことをする。だが、私は誰にも言わないから安心しな」

結香はそう言っつなり、一気に孝二との顔の距離を詰め

「……！」

結香と孝一の唇が重なった。

三章 ピンクなアミーゴ？

昼休み。結香は、缶ビールを飲みながら、窓から外を眺めていた。

「合格だったよ、あの少年は」

結香はそう言って、振り返る。そこには扉の前にたたずむ、コートを纏った緋川がいた。

「それは良かった。僕、結構あの子気に入ってるんだ」

「へえ、珍しい。あんたが人を気に入るなんて」

そう言う結香に、緋川は肩をすくめる。

「ひどいなあ。まるで僕が、普段から人を忌み嫌っているみたいに見える方がいいか」

「違うのかい？」

ニタリと笑みを浮かべる結香。緋川は微笑を浮かべたまま、何も答えない。

「まあ、隊長が気に入るのも分かるわ。中々に面白い少年だった」

「何があったの？」

「いや、ね」

結香は笑いをこらえるように口元を手で覆い、言葉を続ける。

「ほら、少年の中を見ようとキスしたらさ、少年、ものすごい泣きそうな顔して、逃げ出しちゃったの。純情乙女かつーの。あれは間違いなくファーストキスだったね！」

「あらら、そうだったんだ」

「そのせいで、私のほうは少年の能力も手伝って、しっかりと中身を見れたけど、少年には私の知識が届く前に逃げられちゃった」

「残念だねえ。しょうがない。もう一度って言っても、多分嫌がるだろうから、真に説明させよう」

「任せた。それにしても、あの少年初めてだったとはねえ。思いつ

きり舌入れちまったよ。今頃トラウマになってたりして！」

そう言って、結香は膝を叩きながら、大笑いする。

「結香君、相変わらずだねえ……。せつかく美人なんだから、もう少し上品になるうよ」

「およ？ 隊長、まさか口説いてるんですか？」

結香は新しい缶ビールを開けながら、ニタニタと笑う。

「うーん、どうだろう。自分でも分からないなあ」

緋川はわずかに目を細める。

「……いつまでも過去を見ていられないってことなのかな。僕も心の中では 今を生きたがって 寂しくなってるのかも」

「……あ」

結香は目を伏せ、小さい声で、ごめんと言った。

「あんたの気持ちも考えないで、軽率なこと言って……」

緋川は微笑を浮かべ、大丈夫と前置きして、口を開いた。

「以前、本で読んだんだ。いつまでも死んだ 過去の人を思い続けるのは、その人をこの世に縛り付け、苦しめることになる。僕は霊なんか信じないけど、存在しない人への一方通行の思いは、もう止めたほうがいいのかもしれない」

「……隊長」

「身勝手だなあ、すごく。自ら死に追いやって そして、もっともな理由をつけて忘れようとしている」

その場に沈黙が下りる。結香は缶ビールを一気に飲み干し、大きく息を吐く。

「隊長が、あの轟少年のことを気に入った、本当の理由が分かった」

沈黙を破り、結香は言葉を紡ぐ。緋川は結香をまっすぐ見つめる。

「似てるのよ、隊長。あんたと轟少年がね。過去の引きずり方が、特にね」

「……そう かもね」

結香の言葉を聞き、緋川は自虐的な笑みを浮かべる。

「ふふ、こんなんじゃあカウンセラー失格だ」

緋川の眼に悲しそうな色が浮かぶ。だがそれは一瞬で消えた。

「まあ、僕は因縁から逃げられるとは思ってないからね。淡い夢は見ないよ。全ては　僕以外の人の未来のため」

三章 ピンクなアミーゴ？

緋川の背後の扉が突然開いた。緋川が振り返ると、顔色の悪い男子生徒がこちらをうつろな眼で見ている。

「……どうやら患者さんみたいだね。僕は戻るよ」

緋川は結香に軽く手を振ると、男子生徒の横を通り過ぎた。

「……………」

男子生徒は、うつろな眼を一瞬緋川に向けるが、すぐに結香へと視線を向ける。

結香は、手に持つ空き缶をデスクの隅に放ると、片手で髪をかきあげながら、男子生徒に尋ねた。

「どうした少年。顔色が悪いようだが 風邪か？」

男子生徒は何も答えず、ゆっくりと結香の元へ近づいていく。丸椅子にも座らず、結香のすぐ目の前まで近寄る。

「……何だ？ 少年」

自分を見下ろす男子生徒に、結香は上目づかいに見返す。

「……あ……………す……………おっ」

男子生徒の口元が動き、言葉を発する。だが声が小さくて、よく聞き取れない。

「ん？ 何だつて？ はっきり言わないと聞こえんぞ」

男子生徒の口元に、結香は耳を近づける。

男子生徒は、しばらくの間、ぼそぼそと小さい声で言葉を発していたが、やがて少しの間をおいて、はっきりとした声で言った。

「邪魔。死ね」

突然、男子生徒は結香に襲い掛かった。

「っ……！」

男子生徒の手が、結香の首をつかみ、そのまま押し倒す。馬乗り

状態となり、男子生徒の力が増す。

「…………ぐっ！ いきなり大胆な子だねえ…………」

顔を歪めながら、結香は言う。男子生徒は左手を制服のポケットに入れ、そこから小型のナイフを取り出した。

「…………ほう、そうきたか」

結香がそう言った途端、男子生徒が横に吹っ飛んだ。結香が大きく脚を回し、蹴りを浴びせたのだ。

男子生徒はデスクに体をぶつけ、派手な音を立てて倒れる。結香は咳きこみながら、素早く立ち上がる。

「…………悪いね、少年。私はおもちゃを使ったがる男は嫌いなんだ」

男子生徒は、うつろな眼を結香に向ける。その眼からは殺意の何も感じない。

「…………あんた奴隷だね。敵さんの能力は、ナンバー4の『皇帝』つてところか。やっかいだな…………」

男子生徒は、自分の胸元にナイフを固定し、地面を蹴る。

「…………いい構えだ」

結香は小さくそう呟いた。

ナイフ等の刃物は玄人でもない限り、下手に振り回すよりは、勢いに任せて突き刺すほうが、もっとも効率が良いのだ。

結香は体を傾け、寸前で突撃をかわす。そして小さく息を吐くと同時に、男子生徒のみぞおち目掛け、掌底を放つ。

「ぐふつと、空気の漏れたような音がして、男子生徒はその場にひざまずく。」

「…………悪いな、少年。少し眠っててもらおう」

結香はそう言って、片足を垂直に振り上げる。そして男子生徒の頭頂部に、一気に振り下ろした。

鈍く、大きい音が響き、男子生徒は動かなくなった。

「…………ふう、こんなもんかね」

結香はそう言いながら、煙草を取り出し、口にくわえる。

三章 ピンクなアミーゴ？

「おや、あなたも襲われたのですか？」

突然の声。結香は煙草をくわえたまま、振り返る。

そこにはピンクの物体が存在していた。

「ピンク！？」

結香は目を見開き、驚きの声を上げる。

「ピンクではありません。ペディです」

「あ、ああ、ペディさんか」

結香は息を吐きながら、自分を落ち着かせる。やはり何度見ても慣れるものではない。

「驚かせないでよ」

「驚かせるつもりはありませんでした」

ペディはそう言いながら、ずるずると両手で何かを引きずる。よく見ると、それは気を失った男子生徒だった。片手に三人ずつ、計六人を引きずっていた。

「……どうしたの、それ？」

「いきなり襲いかかってきました。説得しても言うことを聞かなかったなので、気を失わせました」

ペディはそう言いながら、両手の六人を一つのベッドに放り込んだ。

その時、再び扉が開く。ペディと結香が顔を向けると、一人の人物がゆっくりとした足取りで、入ってきていた。

「……失礼します」

その人物は、そう言って、一礼する。どこか、眼に悲しい光を宿していた。

「おや、杉山隊長ではありませんか」

ペディはそう言つて頭を下げる。杉山と呼ばれた、その人物は口に微小を浮かべ、言った。

「相変わらずですね、ペディさん。それと頭を下げるのは止めてください。隊長とはいえ、ペディさんのほうが先輩なんですから」

「変な謙遜は逆に嫌味だぞ。杉山竜」

結香はニタリと口元を歪ませながら言った。

「若くして、部隊長に昇格出来たんだ。しっかりと胸を張れ」

結香は煙草に火を付ける。

「それで どうした？ この奴隷共の説明でもしに来たのか？」

結香は、足もとの男子生徒をつかみ上げ、気絶した六人が固まっている一つのベッドの上に、放り投げた。

「はい。緋川隊長が言っていました。敵が目立つ動きをした時が、決行の時と」

「……ほう」

「早いですね」

結香、ペディ、共に小さく息を吐く。

「時間は？」

「今夜。そうなるよう、隊長が仕向けました」

「久しぶりに腕が鳴りますね」

杉山竜は頷く。

「今夜六時。その時にチームの皆を、ここに集合させてください」

四章 戦士と奴隷？

昼休みの中庭。

孝二は火の付いていない煙草をくわえ、ベンチに腰かけていた。向かいのベンチに顔を向けると、坊主頭の男子生徒が、座禅を組んでぶつぶつと何かを唱えていた。よく見ると一ミリ浮いているので、唱えているのは空中浮遊の術だろうか。

「……無心、無心」

先ほどのことを、なるべく思い出さぬよう、何度も荒い深呼吸を繰り返す。

「落ち着け、俺。たかがキスの一つだ。そうそう、気にするな。優なんか何人もの女と遊んでる」

息を吸い込む。かすかな煙草の香りが、口内に広がる。

煙草の香り……。

結香の顔が浮かぶ。

少年。

結香の唇の感触。

すぐ終わる。

自分の舌に伝わる、やわらかく、生暖かい感触。

「だあああああ！ 忘れる、忘れる、忘れるおおおお！！」
孝二は肺の空気を一気に吐き出す。

「おい、その馬鹿」

何度も深呼吸を繰り返していると、突然声をかけられた。

「あの変態女の言っていたとおりだな。みじめな男だ」

振り返ると、一人の青年が立っていた。サングラスと長い黒髪が特徴的だ。

「真？」

「いつから私を呼び捨てられる身分になったんだ、貴様は」

真は悪態を付きながら、孝二の隣に座る。

「よくこんな蚊が多いところに、ずっといられるな」

真は指を動かしながら、寄こせと言ってくる。何をと聞き返すと、煙草と短く返事が返ってきた。孝二は煙草の箱を取り出し、箱の底を叩いて、一本出す。真はそれを無言のまま受け取る。

「俺は蚊が寄つてこない体質なんだ」

「なんだ、それは。まるで農薬まみれの野菜だな」

「……………」

真は煙草をくわえ、孝二の顔を横目に見やる。

「火は無い」

孝二がそう言った途端、真は眉をひそめる。

「何でだ？」

「くわえているだけで落ち着くんだ」

「ガキが」

真は苛立たしげに息を吐きながら、そう言った。

「何の用だよ？」

孝二は率直に尋ねる。真は背もたれにもたれかかりながら、口を開いた。

四章 戦士と奴隷？

「説明しに来てやったんだ。感謝しろ」

「説明？ 何の？」

「貴様の額の目についてだ」

孝二は眉をひそめる。真は自分の右手を持ち上げ、手の甲を孝二に向ける。

「よく見ろ」

孝二は視線を真の手に固定する。眺めていると、しばらくして手の甲に何かが浮かび上がった。眺めていると、しばらくして手の甲に何かが浮かび上がった。

「……？」

真の手の甲に浮かび上がったのは、奇妙な紋様だった。結香の舌にあつたものと酷似している。手の甲の真ん中に「XVI」と描かれており、その数字の左右に縦長のライン。そして数字の上には雷の絵が描かれていた。

「あの変態女の舌にも、これと似たものがあつただろう？」

真が尋ねる。孝二は視線を固定したまま、小さく頷いた。

「何なんだ、これは？」

「刻印。戦士の証であり、奴隷の証だ」

真は右手を動かし、自分のくわえる煙草の先端を指でつまんだ。

「要は超能力の証ってことだ」

真がそう言うなり、真の指先から、乾いた音と共に火花が起きる。

「……！」

孝二が目を見張ると、真はにやりと笑った。煙草の先端からは煙が漂っていた。

「いったい何なんだ、それは」

「知りたければ、もう少し口を慎め。私と話すときは敬語。私の名を呼ぶときは真様だ」

「……」

孝二はあからさまに嫌そうな顔をする。

「嫌だというなら、もう一度変態女とキスすることになるぞ」

「……分かった　分かりましたよ、真様」

「それでいい」

真は満足そうにならずくと、ゆっくりと煙を吐き出しながら言葉を紡ぐ。

「いいか、一つ言っておく。今から話すことは、常人には信じられないことだ。だが、お前に疑う権利はない。全て信じろ」

孝二は頷いた。

「ああ。それで俺が突然キスされた理由が分かるならな」

「関心ごとはそれだけか。まあいい」

真は煙を吐き出す。漂う煙が、徐々に空気に混ざっていく。

四章 戦士と奴隷？

「まず、一つ重大な告白をする。実は、俺は高校生ではない」「やっぱりな」

「ほう、見抜いていたのか。中々優秀だ」

「……………」

多分ほとんどの人が気付いていると思うんだけど。

「翔が見込んだだけはある。実は、俺はある組織に所属していて、その組織の命令でこの学校にきた」

「組織？」

孝二が聞き返すと、真は制服の内ポケットをあさり、中から何かを取り出す。

「これがその組織だ」

取り出した物を孝二によこす。孝二は黙ったままそれを受取る。

「なんじゃこりゃ？」

真から渡されたものは名刺だった。真の名と、組織名らしき物が書かれている。

「Collect Waste Articles・通称『CWA』」

。それが俺たちの組織の名だ」

「CWA？」

「直訳で廃品回収って意味だ。世界中に散らばる刻印を回収する。

それが『CWA』の目的だ」

「刻印って、それだよな」

孝二は、真の手の甲の紋様を指さす。

「敬語で喋れと言っただろうが……。私のほうが年上だぞ」

「……分かりましたよ。それで、何なんですか、その刻印は」

真は煙を吐き出しながら、口を開く。

「実を言うところ、この刻印については、まだほとんどのことが分かっていない。様々な説があるが、まず、その内の一つの話をしよ

う

孝二は黙って真の言葉を聞く。真は続ける。

「これは、もう神話のレベルだな。かつてこの世で神と悪魔の間で戦争が起きた。どちらがこの世界　つまり人間界を支配するかという戦争がな」

真は一呼吸おいて、さらに言葉を紡ぐ。

「だが、その戦争で主に戦ったのは、神の兵士でもなく、悪魔の兵士でもなく、人間だった」

「人間が？」

孝二が聞き返す。真はちらりと横目で孝二を見やる。

四章 戦士と奴隷？

「ああ、その時から人間界には人間が住んでいた。先住民さ。人間たちは神、もしくは悪魔に捕えられ、そして兵士として戦わされていた」

真は煙を吐き出す。

「そして、神や悪魔どもは、とんでもないことをやりだした。それは 捕らえた人間に、自分たちと同じ力を与え始めた」

「神や悪魔の力……？」

「ああ。その後の戦争の結末は書かれていない。だが人間界には、もう神も悪魔もない。残されているのは、この 刻印だけだ」

「……本当の話なんですか？」

「知らん。他にも、古代人の遺物だの、宇宙人の落し物だの、いろいろ説はあるがな。とにかく刻印は存在する。そしてこの刻印は危険な代物だ」

真は右手を掲げる。そして、手の甲の紋様が一瞬輝いたかと思うと、突然その掌に電光が走った。

「ナンバー16。この刻印の名は『塔』」

真は孝二に顔を向ける。

「能力は電撃だ。スタンガンレベルから、稲妻レベルまで自由自在だ。その気になれば、一瞬で人間を黒ずみに出来る」

「……………」

孝二は押し黙る。真は鼻をならし、右手を下ろす。

「あの変態女の刻印は、ナンバー2、名は『女教皇』。能力は、口付けした者の脳内を知り、また、自分の脳内の知識を、相手に与えることが出来る。相手が能力者であれば、ほんの少しだが、その能力を使うことも可能だ」

「……………そういえば疑問を教えてくださいとか言ってたな、あの先生」

「貴様が途中で逃げ出したから、私がわざわざ説明に来てやったん

だ

「真は苛立たしげにそう言った。

「ちよつと待つて。何で俺にそんなことを教える必要があるんだ？」

「敬語」

「……あるんですか？ 真様」

「真は、短くなった煙草を吐き捨て、足で踏み消す。

「合格したからな。緋川の実験に」

「先生の……実験？」

「覚えていないのか？」

「真は、自分の額を指さす。

「一ヶ月前に救急車の中で埋め込まれたらどう？ 貴様が自分の女

に腹を刺された時だ」

「……」

「孝二は目を見開いた。

四章 戦士と奴隷？

「あの時、あの女をおとなしくさせてやったのは、この私だ。少し力が強すぎて、入院させるはめになってしまったが」

気付けば、孝二は真の襟首をつかみ上げていた。

「……何のマネだ、貴様」

「手前か。千里をあんな目に合わせたのは」

真の眼が細められる。孝二の憎しみのこもった眼をまっすぐに見返す。

「この馬鹿が。憎む相手を間違えているということが分からんのか？ 確かにあの女を病院送りにしたのは、この私だ。だが、そもそもあの女がお前に襲い掛かってきたのは、別の能力者のせいだ」

「別の 能力者……？」

孝二の手が緩む。真は孝二の手を払いのけ、あごで座れとうながす。

「刻印の能力者がこの学校にいる。それもくだらんことに使っている。だから私達『CWA』はこの学校に来たのだ。その刻印の回収と能力者の粛清のためにな」

「……………」

孝二は黙ったままベンチに座りなおす。

「最初の質問に返ろう。何故この話を貴様にしたか。貴様が合格したからだ。刻印の能力を与えられても、その能力に溺れず、悪事に使わなかったからな。まあ、貴様の場合は単に、使いこなせなかっただけのようだがな」

「……悪かったな」

「だが、変態女が大丈夫と言っているからな。奴の能力の前に隠し事は出来ん。つまりお前は能力に溺れることはない、信頼できる奴だということだ」

孝二は自分の額を撫でる。

「なあ、俺の能力は何なんだ？」

「敬語を使えと何度言ったら……まあ、いい。諦めた」

真は大きく息を吐くと、言葉を続けた。

「ナンバー17。刻印の名は『星』。能力は、現在過去未来、全てを見通すことの出来る第三の眼を得る。それは自分や他人にとどまらず、そこらの動物から足元の石ころまで全てだ。その全てを見ることが出来る」

「全て……」

「先に言っておくが」

真は孝二の額に指を向ける。

「その『眼』で私を見たら殺すぞ」

「なんか変な趣味でもあるのか」

「殺すぞ」

「……はいはい、分かりましたよ」

孝二はそう返しながら、自分の額に手をやる。

四章 戦士と奴隷？

「全て か。トラウマの原因はこれか」

真はポケットから携帯灰皿を取り出すと、短くなつた煙草をそこに放り込んだ。

「今のうちに能力に慣れておけ。いずれ組織の為に使う時が来る」「え？」

「まあ、そこは貴様の自由意志だがな」

真は立ち上がると、大きく背中をそらせる。

「詳しいことは緋川が変態女に聞け。出来れば放課後までにな」

「あ、ああ」

真は孝二に顔を向けると、じゃあなと軽く手を振り、踵を返した。去りゆく真の背中を、納得のいかないような顔で孝二は眺めていた。

「……結局モヤモヤは消えなかったな」

孝二はベンチにもたれかかり、大きいため息を吐く。

ふと向かいのベンチに顔を向けると、先程の男子生徒がすでに三センチほど浮いていた。

「何でこんな能力を与えられたんだか」

孝二は屋上に顔を向ける。そして両目をゆっくりと閉じる。

「だから違うの。そうじゃなくて本当に急用が出来ちゃったんだよ。この埋め合わせは絶対にするからさ。うん、ごめんね。それじゃあ」

孝二は目をあける。首をめぐらすと、携帯片手に誰かと話している優の姿があった。

「うーん。何でこんな突然に用事が入っちゃうんだろーな。誰かに呪われてるのかな。む、まさか男たちが今度はオカルトに頼って僕の命を狙っているんじゃない」

「相変わらずだな、優」

孝二は息を吐きながら優の名を呼ぶ。

「やつほゝ轟。もう聞いてよ。今日は綾子ちゃんと朝までフィバーの予定だったのに、バイトの店長がいきなりヘルプ頼む。だって。断りきれなかった僕も悪いけどさ。僕の中のこの衝動はどうやって抑えればいいのかさ」

「たまにはいいだろ。てか、いい加減そのネタやめろよ」

孝二はそう言いながらも、内心この会話に安堵していた。刻印の話やらで、現実感を失いかけていたのだ。

四章 戦士と奴隷？

「僕からそのネタを取ったら、僕じゃなくなっちゃうよ」

優はそう言いながら、孝二の隣に座り込む。

「あれ、轟、頭の包帯取ったの？ 結構似合ってたのに」

「似合ってたって……別にファッションじゃねえんだから」

「違うの？ 僕はてっきり轟なりの自己表現か何かと」

「どんな自己表現だ」

「いやあ、今は色んな自己表現があるからね。この前なんか、街中をメイド服着たおっさんが歩いてたよ。あれはさすがに怖かったな」

「それ自己表現と少し違うないか……？」

「いやいや、違うないよ。あのおっさんの中では、その服がもっとも自分を語り、自分を現す服だったんだよ」

「絶対自分を見失っているだろ」

その時、突然優のポケットから電子音が鳴り響く。

「あれ、もう誰だよ」

優は携帯を取り出しながら、ぐちぐちと文句をたれる。

「さっきの女じゃないのか？」

「えっと、あれ、店長だ」

優は通話ボタンを押し、会話を始める。

「もしもし。うんうん。それでどうしたんですか？ え？ それで」

優の顔に驚いたような顔が浮かんだ。

「あ……はい、分かりました」

「どうしたんだ？」

「……いや」

優は通話を切り、携帯をポケットにしまう。

「うん、なんか、トラブル」

「？」

「ま、まあ、轟には関係ないから気にしなくてOKだよ」

「……そうだな」

無意識にぶつきらぼつな答えが口をつく。

「ごめん。轟、ちょっと急用が出来ちゃった。また明日ね」

優はそう言うなり、立ち上がる。

「……何だよ、いきなり」

「もう、そんな事後の女の子みたいな寂しそうな顔しないでよ」

「誰がだ！」

「そうそう、それでこそ轟だよ」

じゃあね〜と優は手を振り、その場から去っていった。

「……………」

孝二は大きく息を吐き、ベンチに横になった。

四章 戦士と奴隷？

晴れ渡り、雲一つない空が眼に映る。孝二はポケットから煙草の箱を取り出し、一本口にくわえる。

「……………」

孝二は目をつむる。中庭に吹く風と煙草の香り。

以前までは優と千里の三人で、昼休みの最後まで馬鹿話をしていた。それがいつも、当たり前のように訪れる日常だった。

だが、千里は入院し、優も急用で、今ここにいるのは孝二だけだ。一人で昼休みの時間をつぶすのは初めてかもしれない。

「なんだか」

遠くの世界に来てしまったような感覚だ。

少しずつ、当たり前前だったことが消えていく。

「嫌な感じだ……………」

孝二はゆっくりと目を開け、木々の隙間から覗く屋上に目をやる。

「……………」

昨日の朝。

「刻印……………」

あの転校生が来たあの朝。

孝二はゆっくり目を閉じる。

かすかに俺は何かを見た。

深呼吸し、気持ちを落ち着かせる。

あの屋上におかしなものを。

「ナンバー17」

今ならもう一度見られるはずだ。

「この刻印の名は」

「星」

四章 戦士と奴隷？

一瞬、箱に戻そうかと思ったが、結局そのまま放り捨てることにした。

地面を転がる煙草。孝二の足元には、今までに吐き捨てた煙草が大量に転がっている。これを見るたびに、嫌でも自分の未練がまじさを再認識してしまう。

「……………」

煙草の箱を見る。残りの本数は三本だった。

これで最後にするか、また新しいのを買うか。

そんなことを考えながらポケットに煙草をしまう。そろそろ昼休みが終わるころだ。

「戻るか」

そう呟き、そこから立ち上がるうとしたとき

「君が　轟孝二君だよな？」

「あ？」

突然声をかけられた。孝二は振り返り、声の主を視界に定める。

そこにいたのは一人の男子学生だった。短く刈りあげた髪とやたらにやせ細った体。開いているのか分からない、糸のように細い眼がこちらをとらえていた。

「……………誰？」

孝二は眉をひそめ、そう言った。その反応を楽しむかのように目の前の男は言葉を吐き出していく。

「やだなあ。そんなに怖い顔しなくてもいいじゃないか」

男は口元をにやにやと歪め、言葉を続ける。

「俺の名前は鍵山亮って言うんだ。よろしく。実はね、君に話しかけたのは、ちょっと聞かせたい話があったさ」

男 鍵山はこちらの態度も気にせず、ひょうひょうとした態度だ。そんな男の態度に、孝二は無意識に不快感を感じていた。

「ほら、君、付き合っている女の子がいるじゃん。三組の」

「千里がどうした？」

「ほら、怒らないでよ。実はそのことで君に聞かせたいことがあってね」

「……………」

孝二は不快な表情そのままに話を聞く。

「今、彼女入院しちゃってるじゃん。あれ、何でか知ってる？」

「…………… ああ、それぐらい知ってる」

言葉尻がぶつきらぼうになっていた。完全に孝二は鍵山のことを嫌っていた。

「それじゃあさあ」

孝二はうんざりしたようにため息を吐く。もう鍵山の声聞きたくもなかった。

「何を話したいんだ。早くしてくれ」

「はいはい、分かっているよ」

鍵山は口元を一層歪ませ、はつきりとした口調でこう言った。

「これは知ってた？ 彼女、ある超能力を持った男に操られているんだよ」

四章 戦士と奴隷？

「正義というのはね。すごく強いんだ」

放課後の保健室。

室内の真ん中に立つ、長いベージュのコートをまとった男。緋川翔。

「どんなに巨大であろうと。どんなに精強であろうと。正義は絶対に負けない力がある」

緋川は傍らに立つ、若き隊長に顔を向ける。

「杉山竜君。それが何故なのか。分かるかい？」

「人は歪むことを嫌うから。でしようか？」

杉山竜は落ち着き払った態度で質問に答える。

「おそらく本能的に。物事を正常にしようとする思いがあるのでしよう。異常は様々な物を歪め、結果的にありとあらゆるものを巻き添えに崩壊してしまう。人はそれを本能的に感じて、避けているのだと思います」

「なるほど。君らしい答えだ」

緋川は顔を前に戻し、言葉を続ける。

「確かにその通りだ。世界のあらゆる事柄は循環している。悪とはその循環を断ち切ることだ。断ち切られた循環は異常をきたし、様々な問題と呼ぶ。やがては循環を断ち切った本人自身にもその問題は訪れるだろう。法律とはその異常を素早く修復させるための手段だということだ」

「長つたらしい説教は後にしろ。さつさと作戦を言え」

机の上に脚を組んで座っている真が口をはさんだ。

「もう、せっかちなね。部隊の士気を上げようと思っ話しているんだから、最後まで話させてくれてもいいじゃないか」

「最後の言葉はこうだろう？ 故に正義とは悪そのものが望む行いであるってな。いい加減聞き飽きたな」

「ひどいなあ。結構一生懸命頑張って考えた言葉なのに」

緋川は肩をすくめて傍らの杉山竜の肩を叩く。

「そんな感じらしいから、今回の作戦発表を頼むよ」

「はい、分かりました」

杉山竜は微笑を浮かべて、室内のメンバーの顔を見渡す。

「舞。情報操作の準備は終わった？」

「完了してます！」

ノートパソコンを抱えた舞が、満面の笑みで答える。

「ペデイさん。真。戦闘の準備はいい？」

「私は常に最高の状態で戦えるようトレーニングをしております」

「ああ、いいぞ」

ペデイ、真、共に答える。

「結香さん。お酒はほどほどに」

「……何で私だけそんな言葉なのさ」

結香は不満そうに唇をとがらせながら、右手に持つビール缶を

気に仰いだ。

「では、行きましょう。今回の作戦は」

杉山竜の口から作戦が発表される。

その作戦に一同は皆同じように目を見開き、驚愕していた。

「おい、それは本当か？ 本気で言っているのか？」

真が立ち上がり、声を張り上げる。

「ええ、本気です。真にはサポートに回ってもらいますが、他の方

は主に雑用をこなしてもらいます」

メンバーは皆、信じられないと言った面持ちだ。

「心配しなくてもいいよ。真のサポートがあればこの作戦の成功は

絶対だ」

一人、微笑む緋川は高らかに宣言した。

「今回の事件は轟孝二。彼が全て解決してくれる」

四章 戦士と奴隷？

放課後の中庭。

時刻は五時を回ったが、けだるい暑さは収まる気配を見せない。

ある超能力を持った男に操られている。

孝二は先ほどの鍵山の言葉を反芻していた。

どういう意味だ？

放課後、時間ある？ もしこの情報を知りたいなら、放課後にまたここに来なよ。

鍵山はそう言っただけで去って行った。

そして今に至る。孝二はベンチに腰掛け、鍵山を待っていた。

「遅いな……。もう一時間は経つぞ」

そう言っただけで、煙草の箱を取り出し、そして残りの本数を見て、苦々しい顔で唸ったあと、それを再びポケットにしまう。先ほどから何度もこの行動を繰り返していた。目を閉じ、苛立たしげにため息を吐く。

「いやあ、ごめんよ。ちょっと遅れちゃった」

どこか鼻につく声。目を開けて振り返ると、鍵山がこちらに歩いてきていた。うすら笑いを口元に張り付けている。

「大事な準備があつてね。これから大事なことがあつてね」

「言い訳はいい。とりあえずお前が言いかけた情報だけ教えてくれ」

孝二は立ち上がり、鍵山の前に立つ。

「……せつかちだねえ」

鍵山はくすくすと笑い、腕を組む。

「そうだねえ。君って超能力を信じる？」

孝二は質問に答えず、鍵山を静かに見続ける。

「……ああ、君って無愛想だね。彼女は君のどこがいいんだか」

「それが関係あるのか？」

「ああ、関係あるさ」

鍵山が右腕を掲げ、パチンと指を鳴らす。

「？」

その行為に孝二は眉をひそめる。だがその疑問は一瞬にして消え失せることになる。

「……何のつもりだ？」

孝二はゆっくりと後ずさりながら、鍵山に尋ねる。だが後ろを確認して、それが無駄な行為であることを悟る。

「これから大事なことがあるんだ」

鍵山は口元を大きく歪め、肩を揺らして笑っている。

「だからさ　その前に君を始末しておこうと思ってるね」

その言葉に呼応するように鳴り響く無数の足音。

孝二はいつの間にか、無数の学生の集団に取り囲まれていた。鍵山の左右には屈強な男子学生が二人ずつ控えている。

四章 戦士と奴隷？

「……おい、俺の名前は轟孝二だぞ」

「うん？ それがどうしたの？」

鍵山は笑みをそのままに言葉を返す。

「俺を優と間違えてないか？」

「いや。あの女たらしには興味ない。ターゲットは君だ」

「なんで俺が がっ！！」

孝二は突然背後から衝撃を食らい、その場に倒れた。

「悪いけど、時間がないから長話している暇はないんだ」

背後を確認すると、木刀を持った男子学生が生氣のない眼で孝二を見つめていた。

「お前……雄太か？」

背後の男子学生は答ええない。孝二は痛む頭を右手で押さえ、周りを見渡す。

孝二の周りを取り囲んでいる、学生たち。その半分は孝二の知っている顔があった。

「……どうなっているんだ？ なんでこいつらが」

孝二の元へ近づいていく足音。視線を向けると、鍵山がこちらに歩いてきていた。

「不思議かい？ 不思議だろ？ でも君はこの答えを見つけられない」

鍵山は孝二の傍らに立つや否や、その腹部目掛け、蹴りをぶち込んだ。

「ぐふっ！！」

空気の漏れたような音が孝二の口から洩れる。

「吐き気がする？ 死にそう？ でも君は助からない」

鍵山は孝二の髪をつかみ上げ、顔を近付けてくる。

「ああ、みじめだね。汚い。とても汚い。千里ちゃんにも見せてあ

「げたいね」

「ああ？」

孝二は目を見開き、鍵山の顔を見返す。

「……手前、何だっただ？ 俺が何をした？ 千里が何の関係がある？」

「何をした、だっただ？」

鍵山は表情を一変させ、孝二の顔を地面に叩きつけた。

「屑が！ 死ね！ 何で手前みたいな奴が！！」

鍵山の行動と同時に周りの学生たちも動き出した。一切手加減することなく、それぞれが手に持つ獲物を孝二に向って振り下ろしていく。

「はは！ やれ、奴隷共！ こいつを殺せ！」

鍵山が一步下がり、そう叫ぶ。周りにいた全ての学生たちが、我先にと孝二のもとに群がり、私刑の輪の中に加わっていく。

鍵山はベンチに座り、その光景を肩を揺らしながら眺めていた。

四章 戦士と奴隷？

「ふふふ、ははははははは！ 素晴らしい光景だ。貴族の前に無能な奴隷は、ただそれに従う。そして下等な家畜は無様に這いつくばる。これが世界の常！ そしてこれが俺に与えられた力！ 最高だ。はは、最高だ！！」

鍵山は腕を掲げ、学生たちの行動を止めさせる。

ゆっくりと立ち上がり、その中心に横たわる孝二のもとへ歩いて行く。

「生きてるか？」

そう言って、立ち止まり、目の前の孝二を見下ろす。

孝二はまるでボロ雑巾のようにそこに打ち捨てられていた。全身が砂まみれになっており、頭からは血を流していた。顔のいたるところが青く変色しており、左腕の関節があらぬ方向に曲がっていた。「……も、く」

「まだ、意識あるんだ。しぶといね、君」

鍵山はその場に屈み、孝二の言葉を聞く。

「何だつて？ 最後の言葉ぐらい聞いてやるよ」

孝二は視線だけを鍵山に向け、喉の奥から絞り出すように言葉を続ける。

「目的……は、何……だ……？」

「目的。目的ね」

鍵山は大きなため息を吐き、質問に答える。

「目的は簡単。君を始末することだ。他にも大事なことがあるんだけど、まずは君を始末しておこうと思つてね。今日出来ることを明日に伸ばすなつて諺があるだろ？ 効率よく、効率よく」

「……？」

「まあ、あれだよ」

鍵山は孝二の耳元に口を近づけ、小さな声で言葉を吐き出した。

「千里ちゃんのごことは俺に任せて、安心して死ねることだよ」

「……！」

孝二は右手をのばし、鍵山のズボンの裾をつかむ。

「い、今、何て言ったんだ……！ 何を……考えている……！」

その反応を楽しむかのように、鍵山は口元の笑みを大きく歪める。
「かわいそうだねえ。君はかわいそうだ。哀れで、何の力も持たない、ただ這いつくばることしか出来ない家畜。君に僕の言葉を理解できるのかい？ 貴族の言葉がね」

鍵山は大きく息を吐き、自らの右手を掲げる。

「俺には超能力があるんだ。能力の名は『皇帝』。この力はどんな奴だろうと従順な奴隷にすることが出来る。手前の友人だろうが、恋人だろうがな」

「っ！ まさか……！」

「その通り」

鍵山は目を細め、さらに口元を大きく歪める。

「俺は千里ちゃんを操って、お前を殺すよう指示したんだよ」

四章 戦士と奴隷？

「！！」

「本当はな。そんなつもりはなかったんだよ。でも、彼女強情なんだ。俺の言うこと全然聞いてくれなくてさ。どんなに脅しても無駄だからさ」

彼女自身の手で、彼女の心の支えを奪ってやろうと思ってね。

鍵山は声をあげて笑う。孝二は痛みをこらえるように歯を食いしばり、言葉を吐き出す。

「手前が……刻印の能力者か！」

「な、何！？」

孝二の言葉に鍵山は驚きの声を上げる。

「何で貴様が刻印のことを知っている！？ まさか貴様もCWAか！」

鍵山は立ち上がり、孝二を見下ろす。そして、しばらくの間、ゆっくりと深呼吸を繰り返して、自分を落ち着かせる。

「それなら　なおさらだ。お前はここで殺す。生かす理由がない」

そう言う鍵山の表情からは笑みが消えていた。

「……殺したけりゃ殺せよ」

その表情を孝二はまっすぐに見返す。

「だが……お願いだ。千里は解放してくれ。俺はどうなってもいい靴をなめると言われればなめるさ。死ねと言われれば死ぬさ！　だから……千里には何もしないでくれ！！」

その言葉に鍵山の表情がみるみる強張っていく。

「貴様は……彼女と同じことを言うんだな。全く同じことを……貴様らは……同じことを」

わなわなと口元が震え、顔がどんどん真っ赤になっていく。

「何なんだよ、それ。ああ？　通じ合っているとでもいうのか！？」

四章 戦士と奴隷？

「お前、最低だな」

「……え？」

孝二はベンチから立ち上がり、鍵山の前に立つ。

「と、突然どうしたんだい？ そりゃあ、ちよつと遅れちゃったけどさ。大事な準備があつたんだよ」

突然の孝二の言葉に鍵山は動転している。

「知っているよ。何もかもな」

「はは……どうしたんだよ。そんな怖い顔して」

鍵山はそう言いながら、右手を素早く掲げる。

「知っているよ。それもな」

孝二はそう言うなり、体を横にそらす。途端、孝二の背後から木刀が振り下ろされ、先ほどまで孝二の頭のあつた場所を空振る。

「……！」

鍵山は後退しながら右腕を振る。周りから無数の学生たちが姿をあらわし、孝二に襲い掛かる。

「知っているよ。全てを！」

学生たちは我先にと手に持つ獲物を孝二に振り下ろしてくる。だがそれらの攻撃は孝二の体をかすめることもなく空を切る。

孝二は四方八方の攻撃をすべて紙一重でかわしていた。

「なっ！ 何で避けられる!？」

鍵山は驚愕の声を上げ、その場から駆け出す。

「逃がさねえよ」

孝二は学生の一人から木刀を取り上げ、それを鍵山に向けて思いつきり投げる。

投げられた木刀は鍵山の頭部に命中。間抜けな声を上げ、鍵山はそ

の場に倒れた。

孝二は鍵山に素早く詰め寄ると、その腹部目掛け、蹴りを放った。

「がふっ!!!」

「どんな気分だ？ 家畜みたいに這いつくばる気分はよ？」

背後からの学生の攻撃。孝二は無言のままそれをかわすと、その学生の顔面を殴り飛ばした。

「……な、何で奇襲が分かった!? 何で攻撃を避けられるんだ!？」

鍵山の叫び。孝二は足もとの木刀を拾い、鍵山に顔を向ける。

「見えてるからな。何もかも。事前に分かっていたら避けるのは簡単だ」

「っ! その額に……あるものは……!!!」

鍵山はひきつったような悲鳴を上げた。孝二の額に、奇妙な紋様が浮かび上がっていたからだ。

四章 戦士と奴隷？

その紋様は巨大な目だった。

大きく見開かれたその目の瞳には『XVII』と描かれており、その目の上部分には七つの小さな星。下部分には瞳から流れる涙を包み込む壺のような物が描かれていた。

「ナンバー17。この刻印の名は『星』。これで見たんだよ。こいつらの攻撃の軌道も。手前がさつき俺を殺そうとしたこともな！」

「ば、馬鹿な……。俺以外の刻印の能力者がこの学校にいるはずが……まさか、CWAか!？」

「違う。俺は普通の学生だ。CWAとは関係ない。だが」

孝二は木刀を背後に振る。背後から襲いかかるうとしていた学生をなぎ倒す。

「手前が俺の日常を壊そうってんなら容赦しない。殺す」

孝二は振り返りながら、そう言った。鍵山は体をがくがくと震わせ、口を開く。

「そ、その力は誰から貰ったんだ？」

「あ？」

孝二は何と答えようか、一瞬迷う。

「ベージュのコートを着た男だ」

緋川、と直接言うことが出来ず、孝二は率直にそう答えた。

だが、その答えを聞き、鍵山はその目を大きく見開かせた。

「ああ！ あの人から貰ったのか！ ということは君は俺の味方だったのか！」

「はあ!？」

孝二は頓狂な声を上げるが、鍵山は構わず、孝二の脚に抱きつくように詰め寄ってくる。

「ああ、すまなかったよ。あの人気が利かしてくれただね。それなのに俺は君にひどいことを。本当にすまなかったよ。君がいれ

ば百人力、いやもう万人力だ！」

突然の態度の豹変に、孝二は訳が分からず言葉を失っていた。

「ああ、本当に助かるよ。千里ちゃんには君のような男が似合うよ。まさにお似合いのカップルだ！ さあ、俺達の力でCWAの奴らを返り討ちにしよう！」

「おい、ちよつと待て」

孝二はとりあえず、鍵山を黙らせる。

「何か勘違いしてないか？ 俺が刻印を貰った相手は」

「緋川先生だろ？」

孝二は目を見開き、言葉を飲み込む。

「俺もあの人に刻印の能力を貰ったんだよ。刻印の使い方、そしてCWAの情報をくれたのもあの先生だ」

鍵山は興奮したように言葉を続ける。

「さあ、今宵CWAの奴らが俺達からこの力を奪いにくる。そんならよう緋川先生が仕向けてくれたんだ。はは、馬鹿な連中だ！ 奴らも俺の奴隷にしてやる！ 正直一人じゃ不安だったんだ。いや、本当に君が加勢してくれて助かるよ！ 連中が動き出す時間は六時だ」

孝二はもう訳が分からなくなっていた。

五章 歪んだ日常？

「まだ怒っているのかい？ 杉山竜君」

緋川は窓の外から下校していく生徒たちを眺めていた。

「あの時、せめて一言言つて欲しかったんです」

杉山竜はあまり感情のこもっていない声でそう告げた。夕焼けでその表情はよく見えない。

「僕がCWAに入った理由は 日常を守るためです。誰もが、ただ目の前の日常に一喜一憂してられる平穩。僕が求めるのはそれだけです」

「それだけ。簡単に言うね。それこそがどんなものよりも手に入れるのが大変だというのに」

「平穩を築き、日常を支えるのが僕達の役目。誰もそのことを知らなくていい。知る必要が無い。苦しい現実は全て僕達が引き受ける」
「だからこそ か。でもね、杉山竜君。现阶段ではそれは不可能なんだ」

緋川は振り返り、若き隊長に顔を向ける。

「足りないんだ。今の日常に固執してしまつては取り返しの付かないことになってしまう。僕の計画はまだ完璧じゃない。そのためには」

「そのために 日常を壊すのですか？」

その言葉に、緋川は優しく微笑んだ。

「日常など、とつくに壊れている」
「……………」

緋川は再び窓の外に顔を向ける。

「人が関わるものは 例えどんなものであると歪むんだ。歴史を見てみるといい。常にどこかが歪み、それを治すために多くの犠牲が払われる。きつかけは些細なものさ。その些細なものが人だ。そしてどんな人が歪み、日常を破壊する引き金になるのか。それは

そうなつてみないと分からない」

「……あえて自らの手で、その歪みを生み出すのですか？」

「それがこれからの計画で大切な役割を果たす。絶対にやめるわけにはいかない。歪みによって犠牲は出るだろう。だが、仕方ないなんて言葉を使う気はない。好きなだけ僕を恨んでほしい。僕は自分が幸せになるうなんて思ったことが無い」

「……………」

緋川の言葉に、杉山竜は諦めたように息を吐いた。

「教官が泣きますよ」

「？　そこで何で彼女が出てくるんだい？」

「分からないならいいんです」

杉山竜は軽く微笑み、窓の外の夕日を眺める。

その細められた眼には、何かを決意したような力がこめられていた。

五章 歪んだ日常？

「千里ちゃんに君を襲わせたのはちょっとした出来心だったんだよ。お願いだから許してくれよ。ほら、これから俺達一緒に戦うわけじゃないか？ だから仲直りしようじゃないか」

「……………」

孝二は沈黙したまま、鍵山を見つめていた。元々あまり好きな相手ではないのに、馴れ馴れしくなったことで余計に存在がうっとうしくなっていた。

「誰も一緒に戦うなんて言っていない」

「またまたあ。そんなこと言わないでさ。困った時はお互いさまっというでしょ？」

何がお互い様だ……………」

孝二はうんざりしたようにため息を吐き出した。

「ねえねえ。君の刻印はどんな能力なんだい？」

「あ？」

「ほら、お互いに能力を理解しといたほうが連携も取りやすいでしょ？」

孝二は再びため息を吐く。孝二がそのまま黙っていると、なおもしつこく鍵山は尋ねてくる。

「ああ、分かったよ。俺の能力は」

貴様の能力は、現在過去未来、全てを見通すことの出来る第三の眼を得る。それは自分や他人にとどまらず、そこらの動物から足元の石ころまで全てだ。その全てを見ることが出来る。

「……………」

「あれ、どうしたんだい？ 轟君」

あらゆる過去。

「なあ、一つ聞いていいか？」

「え？ ああ、うん。いいよ。何だい？」

孝二は額の眼のイメージをゆっくりと開始し、鍵山をまっすぐに見つめる。

「お前は 千里をどうしたんだ？」

「え……？ またその質問かい？ もうしつこいなあ」

刻印の眼が開き、脳にその眼から伝えられる映像が浮かぶ。

鍵山は孝二の額に突然刻印が浮かんだことで、驚きの表情を見せる。

「い、いきなりどうしたんだい？ 俺達仲間じゃないか」

「いいから質問に答えてくれ」

鍵山の脳内に侵入していくような映像が脳に浮かぶ。そしてそこから鍵山を中心に時が逆流するような光景が広がっていく。

第五章 歪んだ日常？

「えっと……俺は、その……千里ちゃんのことを好きだったんだよ」
俺が千里に刺された日だ。

映像がその時の鍵山に固定されるよう、イメージを送る。うまく鍵山の目線で固定され、そこからその日の日常が流れていく。

「それで……彼氏がいることは分かっていたけど……諦めきれなくて……思い切って告白することにしたんだ」

「ねえ、俺と付き合ってくれない？」

鍵山の声が自分の中から発せられたような奇妙な感覚だ。映像は鍵山の言ったとおりに行っている。

「でも、彼女は彼氏がいるからダメだって。それでちょっとムカついて彼氏を殺してやるって思っちゃったんだ」

「ごめんなさい。私付き合っている人がいるの」

どこかの教室だろうか。目の前で千里が頭を下げていた。鍵山の記憶と分かっているけど、その他人行儀な態度に軽いショックを覚えた。

「それで、この刻印の力で彼女を奴隷にして、君を刺すように」
「いや、放して！」

目の前にいる千里に鍵山の手が伸び、千里の肩を乱暴につかむ。

「何であんな奴が良くて、俺がダメなんだ！！」

鍵山の怒声。恐怖に歪んだ千里の表情がこちらに向けられる。鍵山の手が千里の襟首をつかみ上げ、激しく揺らす。

「俺のほうか金も持っているし、頭も良い！ あんな何の取り柄もない不良のどこがいいんだ！」

千里の足がもつれ、倒れ込む。それに釣られるように鍵山自身も倒れ込んだ。

「……俺のほうか千里ちゃんを幸せにしてやれる」

千里に馬乗りになった状態で、鍵山は静かにそう告げる。

千里は恐怖と怒りが混じった眼でこちらをまっすぐに睨んでいた。
『孝二は私に自分勝手な押し付けなんかしない』

鍵山の口から小さな悲鳴が漏れ、その場に倒れ込んだ。千里は鍵山を押しつけ、急いで立ち上がった。

『ちくしょう……。このアマ……。』

鍵山はそう呟いて、股間を抑えている。どうやらそこに一発蹴りをくらったらしい。

第五章 歪んだ日常？

『自分の都合のいいことしか許せないあんたなんかより、孝二のほうがずっと格好いいわよ！』

教室のドアの前で千里が叫ぶ。鍵山の視線が千里をとらえる。

『何だその言葉は？ 逃げられると思っっているのか？』

鍵山の右手が動く。途端、教室のドアが開き、数名の男子生徒が入り込んでくる。千里は驚き、振り返る。

『その女を抑えつけろ！』

男子生徒は言われるがまま、千里の腕をつかみ上げ、床に抑えつけた。千里が悲鳴をあげようと口をあけるが、途端男子生徒の手で口をふさがれる。

『強情な女だ』

鍵山はそう言いながら、千里の髪をつかみ、持ち上げるようにして体を起こさせる。

『まずは一発お返しだね』

そう言うなり、鍵山の手が千里の頬を引っ叩いた。千里の憎しみのこもった眼がこちらを睨んでいる。

『何だその眼は？ お前が先にやったことだろう？ 本当はこれくらいじゃ足りないくらいだぞ？』

鍵山の口から押し殺したような嘲笑が漏れる。

『もう一度、よく考えてみない？ 千里ちゃん。俺は出来るだけ乱暴なことはしたくないんだ。本当だよ。君が首を縦に振ってくれただけさ。俺のような特別な人間の彼女になれるんだ。この機会を逃したら君は一生後悔することになるよ』

千里の口元を覆っていた男子学生の手が離される。千里は目に涙を浮かべ、沈黙したままこちらを睨んでいる。

『君がそんなに拒否するなら……君の彼氏にも危害が加わることになるよ？ それでもいいのかい？ 君は自分の為に彼氏を犠牲にす

るの？』

その言葉に、千里の眼に一瞬驚きの色が浮かぶ。だがそれはすぐに消え失せ、こちらを憐れむかのように口元に笑みを浮かべる。

『あんたみたいな奴にやられるわけないじゃん。孝二は強いしそれに優もいるし』

『……………』

『馬鹿みたい。一人の女をこんな大勢で抑えつけてさ。こんなことして人を見下して、何が楽しいのよ。あんたみたいな奴を臆病者って言うのよ』

五章 歪んだ日常？

『千里ちゃん……』

鍵山はつかんでいる千里の髪をますます締め上げる。千里の顔が苦痛に歪む。

『君はこんなに美しいのに、何故こんなにも性格が悪いのかなあ』
千里の襟首をつかみ、顔を近づける。

『あんまり聞き分けの悪いことばかり言っていると、お仕置きするよ？ まあ、要は 』

鍵山は口を千里の耳元に持っていき、静かに告げた。

『犯すよ？』

その言葉に千里の肩が若干強張った。

顔を千里の前まで戻す。千里はまっすぐにこちらを見返していたが、その表情の奥からは恐怖が見て取れた。その反応に満足するかのようになり、千里の瞳に映る鍵山の表情が大きく笑みの形に歪む。

『どうしようかなあ？ 千里ちゃんがわがままばかり言うなら、不本意だけどお仕置きしないとイケなくなっちゃうんだけどね』

最低な不快感を催すねっとりとした声。千里の体が恐怖をこらえきれなくなり、体が徐々に震えていく。その眼からあふれた涙が頬を伝っている。

『ねえ、千里ちゃん。君はどうしたい？』

千里の両眼から次々に涙がこぼれていく。今まで必死にこらえていたものが崩壊してしまい、止められなくなってしまったのだ。

孝二は目を閉じてしまいたかった。こんな表情の千里を見続けたくはなかった。だが、これはただの映像ではない。

過去に起きた現実なのだ。

『ねえ、答えてよ。千里ちゃん』

鍵山の言葉。涙を抑えきれず　それでも何かを必死にとらえるように表情を強張らせ、こちらをまっすぐに見返している。

『ねえ、答えてよ』

途端、視界が一瞬曇った。

『うつ！』

鍵山の小さい悲鳴が漏れる。やがて視界が徐々に元に戻っていき、再び千里をとらえる。

『君はなんて下品なんだろっね……』

『ふん』

千里は涙を流しながら　それでも微笑みを浮かべ、こちらを見返していた。

五章 歪んだ日常？

『あんたにはそれで十分でしょ？』

鍵山の手が動き、千里の頬を思いつきり引つ叩いた。

『このアマ！ 人の顔に唾を吐きやがって！！』

千里の襟首をつかみ、その場に押し倒す。

『犯してやる！ 糞アマがつ！！』

鍵山は襟を乱暴に破り取る。千里の下着が露わになり、鍵山の中に奇妙な興奮が生まれる。

『ははっ！ どうされたい？ 怖いか！？ この糞アマ！！』

千里の顔をつかみ、こちらに向けさせる。千里は涙を流しながらも、こちらを嘲笑うかのように見つめていた。

『……おい、なんだその眼は』

鍵山の声が曇る。千里は肩を揺らしてこちらを笑っている。

『犯せば？ 好きなだけ。それで何になるって言うの？ あんたが私に何をしようと、私はずっと孝二だけを愛し続けるの。あんたは空っぽな体だけで満足すればいいのよ。この体がどんなに汚れようと、孝二は私をずっと見てくれるもん。あんたなんかには分かんないでしょうけど』

『……………』

千里のまっすぐすぎるその視線に、思わず鍵山は目をそらした。

それは千里の迫力に気圧されたことを物語っていた。

鍵山は静かに立ち上がり、無言のまま窓辺に置いてある自分の鞆に歩いて行く。

鞆を開き、そこから取り出した物。それは一本のナイフだった。

鍵山はそれを強く握りしめ、千里のもとへ戻っていく。

『何？ 今度はそれで脅すの？』

千里の嘲るような言葉。鍵山は無言のまま、自身の左手に持つナイフを見つめる。

『何、簡単な話だよ』

鍵山の体が震えているせいか、ナイフの切っ先がぶれている。鍵山は視線を千里に向け、静かに口を開いた。

『君の彼氏を殺してやるよ。そんなふざけた戯言が永遠にほざけないようにね。ただし殺すのは僕じゃない』

鍵山は右手を掲げる。その掌に奇妙な紋様が浮かび上がった。それは玉座のような形をしていた。中心に『I V』と描かれており、その玉座の左右には錫杖のような物が対称的に描かれていた。

『ナンバー4。この刻印の名は『皇帝』』

その右手が伸び、千里の額に触れた。

第五章 歪んだ日常？

『殺すのは君だ！ このナイフでね！ ずっとずっとたにしてやりなよ！ 君がそこまで愛する彼を君自身の手でな！』

途端、鍵山の触れる額が光を放つ。

嫌だ。

突如脳内に流れる千里の声。鍵山の手を伝うように映像が動き、千里の視界が映り込む。

体が……動かない！

目の前の鍵山が肩を揺らして笑っている。その顔は醜く歪んでいた。

『さあ……』

鍵山がその手に持つナイフを差し出してくる。

『これで奴を』

千里の右腕が動く。

どうなっているの……！？

ナイフをしっかりと受け取り、千里の口が動く。

『はい』

何で！ 声が勝手に！

左右で千里を抑えつけていた男達が離れる。千里はゆっくりと自分の携帯電話を取り出し、番号を呼び出す。相手は『轟孝二』と表示されている。

孝二は目を見開く。この日、この時間の千里からの電話。

映像の時間を二十分ほど飛ばし、映った光景。

記憶に残る公園。

「ぐっ……」

孝二は無意識に拳を握りしめる。動悸がどんどん激しくなってい

く。だが、眼は閉じようとはしない。閉じてはいけない。そんな考えが孝二の中にあつた。

『千里？』

聞きなれた　だが、どこかいつもより少し違和感のある声。

『どうしたんだ？　突然呼び出して』

目の前に立つ一人の男。

五章 歪んだ日常？

『ちょうど優と一緒にいたからよ。そこまでバイクに乗せてきてもらったんだ』

暗くて顔がよく見えない。千里はまっすぐに目の前の男を見つめていた。後ろ手に組んだ手にはナイフが力強く握られている。

嫌……。

ゆっくりとした足取りで千里は目の前の男に近づいていく。

嫌だ、助けて！ 嫌っ！

『……どうした？』

男のほうもこちらに近づいてくる。近づくにつれて、互いの姿もはっきりと見えてくる。

逃げて！ 逃げてよ、孝二！

闇夜から浮かび上がってきた、男の顔。見慣れた自分の顔。

その顔は驚愕に満ちていた。

『千里！ いったいどうしたんだ！？』

映像の孝二が叫ぶ。千里の顔色の悪さと服の乱れに気付いたようだ。

孝二、逃げてよ。何で逃げてくれないの！？

孝二がこちらに近づいてくる。その度に千里の悲痛な叫びが頭の中に響く。

『千里！』

孝二の手が千里の肩をつかむ。千里は孝二の目をまっすぐに見つめる。孝二の瞳に映る千里の顔は微笑んでいた。だが、それは今の孝二にはとても悲痛な笑みに見えた。

『ちさっ……！』

映像の孝二の言葉が途絶えた。

目の前の孝二は大きく目を見開き、喉の奥から声を出そうとしていた。だが、その口からは乾いた空気の流れる音しか聞こえなかった。

た。やがて肩をつかむ力が一瞬強くなったかと思うと、まるで糸の切れた人形のように孝二は崩れ落ちた。

あ、あ……。

千里の手は真っ赤に染まっていた。

嫌ああああああああ！！

第五章 歪んだ日常？

千里の悲鳴。だが、それは声にはならない。静かに立ちすくんだまま、目の前にうずくまる孝二を見つめていた。

お願い、死なないで！ 誰かつ！ 誰か助けて！！

千里の体は、その場に屈みこみ、うずくまる孝二を仰向けに転がす。

孝二は肩で小さな呼吸をしながら、虚空を見つめていた。

『確実にとどめを……』

千里の口から小さくそんな言葉が紡がれる。そして右手を孝二の腹部に突き立てられたナイフへと伸ばす。

嫌だ……。嫌だよ……。誰かぁ……。

千里の悲痛な思いが響く。意志とは無関係に手はナイフへと伸びていく。

『千里ちゃん！』

突如、背後から発せられた聞きなれた声。それと同時に足音がこちらに近づいてくる

優……？ 優！ 早く何とかして！

千里の体は突然の呼びかけに全く動じず、目の前の孝二にとどめを刺すべく、ナイフに手をかける。

その瞬間、何かがショートしたような音が響いたあと、千里の意識はなくなった。

五章 歪んだ日常？

「ど、どうしちゃったの！ 轟君」
鍵山が慌てたような声を上げる。

「……あ？」

孝二は鍵山の顔を見る。そして自分の変化に気づいた。

孝二は 涙を流していた。

「……ああ」

孝二は右手で顔を覆い、大きく息を吐く。だが、そうするたびに
涙は次から次へと溢れてくる。

ちくしょう。

自分の顔に爪を立てる。

「あんな包帯巻いて、過去から目をそむけて」

「え？ どうしたの？」

孝二の突然の言葉に、鍵山は頓狂な声を上げる。孝二は鍵山のこ
となど意に閑せず、言葉を続ける。

「最低な男だな。あんなに怖い思いしたつてのに。一言でも 千
里が弱音を吐いたか？ いつも言ってくれることは、俺を心配した
言葉じゃないか。煙草やめるとか。退院したら遊びまくろうとか。
そんな言葉じゃないか」

孝二は頭を激しく掻き毟る。皮膚が破け、ところどころから血が
流れ出す。

「ちくしょう！ 様子がおかしかったんだろ！ 何でそのことを聞

かなかつたんだ！？ くだらねえトラウマなんか悩ませやがって！ 千里は、千里はずっと怖い思いしたつてのに！！ 手前のとばかりで悩みやがって！！ 少しでも千里を気にかけてやれば千里を支えてやればっ！！」

孝二は立ち上がり、絶叫する。その壮絶な叫びに気圧され、鍵山はその場に尻もちをついた。

「と、轟君？」

鍵山が孝二の名を呼ぶ。孝二は顔を頭上へと向け、大きく深呼吸する。そしてゆっくりと顔を鍵山のほうへと向けた。

なぎ払う。

「殺す……殺す……殺してやる……」

孝二の背後で、男達が動く。孝二は後ろを振り返ることなく攻撃をかわし、的確に、かつ容赦なく男達を叩き潰す。

「全部分かるんだよ」

様々な方向からの攻撃。だが、それらは一切孝二に命中することなく、むなしく空を切る。そして孝二の的確なカウンターで次々と男達は戦闘不能になっていった。

五章 歪んだ日常？

「はは……」

孝二は木刀を握る手を強く握りしめ、その感触を確かめる。目の前には無様におびえる鍵山。周りには意識を失った屈強な男達。

「はは……当たらない。何もかもが見える。全てが分かる！ はははははは！！ 鍵山あ、羨ましいだろう？」

孝二は口元を歪め、肩を揺らす。

孝二は笑っていた。

「た、助けて……」

鍵山はもう孝二の目の前だ。体を震わせながら、孝二を見つめている。

「ああ？ 今、なんつった？」

木刀が振り下ろされ、鍵山の額を割る。

「何て言っただ？ もう一度教えてくれよ」

鍵山は声にならないほどの悲鳴を上げ、その場をのたうちまわる。

孝二はそんな鍵山の様子を見て、ますます口元を強く歪める。

「おい、言えよ。言えって言ってるだろうが！！」

孝二は鍵山に向かって蹴りを放ち、さらに間髪入れず木刀で殴打する。

殴るたびに響く、鍵山の汚らしい悲鳴。それがますます孝二を楽しませた。

「はは！ 汚いんだよ屑が！ 屑が屑が屑が！」

足で鍵山の首根っこを押さえ、動きを止める。鍵山は失神寸前の顔だった。孝二は木刀を持つ右手を大きく掲げ、その顔を見下ろす。

「思い切り振りおろせば」

頭蓋も砕けるか？

脳髓が飛び散る様を頭に思い浮かべ、孝二の顔に一瞬恍惚的な表情が浮かぶ。

そして孝二は木刀を振り下ろした。

第五章 歪んだ日常？

「あらかた片付いたかな？」

校舎裏の開けた場所。そこに結香とペデイがいた。

「緋川の奴が仕組んだとはいえ、本当に一カ所に奴隷が集まっているとはねえ」

「そうですね。しかし、操られているとはいえ、教え子に手を上げるといのはあまりいい気持ちではありませんね」

ピンクの塊 ペデイが気絶した生徒たちの塊を見ながら言った。彼らは作戦で指示された通り、主に奴隷として操られている生徒の排除を行っていた。

「しかし、驚いたね、今回の作戦。あの子にすべてを任せようなんて」

「確かに。私は彼とあまり会話をしていませんから、彼がどういった子なのかが、まだよく分かっていません」

「やっぱり不安？」

「当たり前です」

ペデイは結香に顔を向け、言葉を続ける。

「刻印を甘く見てはいけません。あの巨大な力は巧みに人の心の中に侵食してきます。今までが大丈夫だったから、今後も大丈夫なんて保証はないのです。私は今までに、刻印によって心を歪められてしまった人間を何人も見てきました。それがかつて共に戦った友でもありました」

ペデイのまっすぐな意見に、結香は憂鬱そうに煙を吐き出す。

「あの子はそうじゃないと信じたいね。現に私はあの子の中を見た。純粹な良い子だったよ。そう簡単に心を歪められるとは思わない。」

そう感じたから合格としたんだよ」

「私もそう信じたいです。ですが、刻印は使いこなせるようになってからが一番危険です」

ペディは夕焼けに染まった空を眺め、ポツリと呟いた。

「あの子が 緋川隊長の二の舞にはならないといいんですが」

「……………」

その言葉に結香は目を伏せ、静かに煙を吐き出す。

「……………信じたいね」

その言葉はとても小さく、ペディには聞こえなかった。

五章 歪んだ日常？

孝二は荒い息を整えようと、何度も深呼吸を繰り返す。

俺は……。

目の前には横たわる鍵山。そして血に染まった木刀。

孝二は目の前の光景に、一瞬体を震わせる。そして先ほどからずっと震えている右手を見つめた。

俺は……。

強く握りすぎてどす黒く内出血している右手を見て、思わず後ずさる。

俺は…… いったい何を考えていた？

鍵山に視線を向ける。意識を失っているのか白目をむいて、倒れている。その頭部のすぐ横の地面がぼっこりと凹んでいた。

孝二は鍵山の頭部に振り下ろすことが出来なかった。

「俺は…… いったい何をしようと……」

眼に血が入り、その痛みに目を閉じる。

手に残る痛み。先ほどまでであった感触の余韻。背中に悪寒が走る。

孝二の中に言葉に出来ない恐怖が宿っていた。自分が行おうとしていたことの恐ろしさを、その時やつと理解した。

「俺は人を…… 殺そうとしていたのか……？」

孝二は額に手を当て、何度も深呼吸する。

あいつは最低の屑だぞ？

何度も深呼吸し、額の眼が閉じるイメージを繰り返す。

何故、殺さない。情けのつもりなのか？

「黙ってる……！」

自分の額を殴りつける。鈍い音と共に一瞬意識が遠くなる。

殺してたまるか……！

歯を食いしばり、再び自分の額を殴りつける。

罪を背負って……千里が喜ぶか？ 手前の気分が晴れるか？

ちくしょうがっ！！

突如ガラスの割れたような音が脳内に響いた。

「がっ！！」

足元がふらつき、その場にひざまずく。額に手を当て、そこを軽くさする。

「……ああ、ちくしょう」

孝二はその場に座り込み、大きくため息を吐いた。額から手を離すと血がべっとりとついていた。

五章 歪んだ日常？

「やっと……治まったな」

空を見上げる。もう日は傾き、暗くなり始めていた。おぼろげな月がこちらを見下ろしている。

「……今日は星が綺麗なんだっけ？」

目を細め、空の月を見返す。

「千里……」

千里に会いたい。

孝二は目をつむり大きく息を吐き出す。額の血を拭い、目をあける。

鍵山の奴はどうしようか？

そう考えながら、視線を前に戻す。

「あ？」

血の染みがついた木刀の転がる風景。何故か鍵山の姿が見当たらない。

「鍵山の奴がいな」

背後からの足音。

振り返ると、屈強な男が手に持つ凶器をこちらに振り下ろそうとしていた。

「……」

鍵山の奴、意識を取り戻したのか！？

振り下ろされる凶器に、思わず目を閉じ、身をすくめる。その瞬間

「大したガキだ。少し見直したぞ」

「え？」

聞きなれた声。そしてそれに重なるように耳に響く、チリチリと

ざわつく雑音。

「次は手加減を間違えんぞ」

バチン、と何かがはじけたような音が響く。孝二が目を開けると、目の前の男はその場に倒れ伏せていた。

「ふん。緋川の奴はこうなることを見越していたのか」

背後からの声に振り返ると、長髪の男がこちらに近づいてきていた。

「真！」

「真様だ、アホが」

真はそう言いながら、座りこんだ孝二の前に仁王立ちする。その全身からはチリチリと稲光を発していた。

五章 歪んだ日常？

「ひどい面だな」

「……悪かったな」

真は軽く鼻を鳴らしながら、右手を差し出す。

「だが、根性は気に入った。ほら、手を貸してやろう」

「……………」

差し出された右手と真の顔を交互に見る。そしてしばらくして、

孝二はその右手をつかんだ。

「……………」

孝二はそうポツリと呟いた。

「何、こちらも礼を言わせてもらおう。奴を捕らえる手間が大分省けたからな」

「奴……………」

その言葉を聞いた瞬間、孝二ははっとしたように辺りを見渡す。

「そうだ。鍵山の奴は？」

「さつき校舎に逃げていくのを見たぞ」

「それなら追いかけないと！」

走り出そうとする孝二の肩を、真が押さえる。

「心配するな。もう奴は逃れられない。ここから先は私達の仕事だ」

孝二は真に顔を向ける。サングラスの奥の鋭い瞳が孝二をとらえていた。

「保健室に行くぞ。額の傷を治療しないとな」

孝二は納得のいかないような顔を向けるが、真の有無を言わさぬ迫りに気圧され、結局曖昧に頷くしかなかった。

「それでいい。ガキは素直が一番だ」

真が歩き始める。孝二はその背中を追いかけてようとして、ふいに何かを感じて振り返った。誰もいない中庭を見渡す。そして視線を空へと上げ、完全に日の傾いた夜空を眺める。

「!?!」

孝二は目を見開き、その場に立ちすくんだ。

「どうした?」

孝二の様子に気付いた真が振り返る。

「この空は……見覚えがある」

突然の孝二の言葉。真は眉をひそめ、同じように夜空に視線を向ける。

「この空がどうしたって?」

「見たんだ。確か真達が転校してきた日だった」

孝二は振り返り、真に向き直る。

「まだ刻印の目が開きつぱなしかった時だ。その時に一瞬だけだが妙なものを見たんだ。ちようどこんな星空だった」

真は視線を下ろし孝二を見る。

「何を 見た?」

「……………」

真の言葉に一瞬孝二は言葉に詰まる。やがて、ゆっくり吐き出すように言葉を紡いでいく。

「本当に一瞬だけだったから、何かまでは分からなかったけど」

孝二は顔を上げ、そこから見える屋上を指さす。

「屋上だ。屋上にそいつはいた」

「そいつ?」

「ああ」

孝二は真の顔をまっすぐに見つめ、こう言った。

「悪魔だ。黒い、禍々しい姿をした悪魔だ」

五章 歪んだ日常？

「何で、俺がこんな目に……」
薄暗い廊下。

鍵山は割れた額を手で押さえ、脚を引きずるようにその場所を歩いていった。抑える手の隙間からは、ぼたぼたと血が滴り落ちている。「……ちくしょう。完璧だったはずだ。CWAの連中を仕留めて、そして永遠に俺が皇帝として君臨する。その予定だったのに！」
鍵山は辺りを見渡し、右手を掲げる。

「くそ、奴隷共がこない。一体どうなってやがる」
何度も悪態づきながら、鍵山は歩を進める。廊下は静まり返っており、聞こえるのは自分の荒い息と足を引きずる音だけだ。

鍵山は少し歩きたびに何度も辺りを見渡す。そして誰もいない校舎を再び歩き始める。

「くそ……。誰か、誰かいないのか……？」
鍵山は何度もそう呟く。最初は淡々とした言葉だったが、徐々にそれに嗚咽が混じっていた。

「ちくしょう……」
その時、突然ポケットから電子音が鳴り響いた。
「ひい！」

突然のことに鍵山はその場で腰を抜かす。どうやら携帯電話が着信を告げたようだ。鍵山は急いで自分のポケットから携帯を取り出す。

『やあ、鍵山君かい？』

「……！」

予想外の電話の相手に、鍵山は一瞬声が出なかった。

「あ、あ……」

「どうやら負けてしまったようだね。だから言ったただろう？ C W Aを甘く見るなど」

「ああ、マスター！」

鍵山が電話を受け取った相手。

「せっかく君に刻印の能力を与えてあげたというのに、残念だよ」

「マスター！ 俺が過信していました。助けてください！」

それは鍵山に刻印を与えた張本人だった。マスターと呼ばれた男は言葉を続ける。

「ああ、その為に電話をしたんだ。君がC W Aに捕えられるわけにはいかないからね」

「ああ、ありがとうございます。マスター！ それで、俺はどうすればいいですか？」

「そうだね……」

電話の相手は少し考え、そして言葉をこう続けた。

「屋上まで来てくれるかな？ 夜空がすごく綺麗だよ」

五章 歪んだ日常？

「今回の実験はすごく良い成果を出してくれた。僕は嬉しいよ」

夜風の吹きつける屋上。広々とした屋上に、ベージュのコートをまとった男がいた。足元まで届く、そのコートが風になびいている。「実験……？」

鍵山は溢れる血を押さえながら、目の前の男の言葉を反芻する。

「そう、これは実験なんだ。期待する成果として刻印の能力を持つにふさわしい人材の確保と、CWAの革新派の連中を黙らせる。その二つの目的のね」

コートの男は、優しい微笑を浮かべ、言葉を続ける。

「僕は常に唱えてきた。大いなる力は危険であると。自らの精神に伴わない巨大な力は確実に人の心を歪めると。だが、革新派の連中は、この刻印が新たな時代を作る足掛かりになると言ってはばかりない。いつ、誰が作ったかも分からないこの刻印を。その気になれば、一人の子供でも一つの殺戮兵器となる可能性を持ったこの刻印をだ」

男の頬笑みは相変わらずだ。だが、その笑みは危険な光を宿っていることに鍵山は気付いた。

「だから、僕はこの実験を思いついたわけだ。大いなる力を与えることで歪みを誘発するというね。これにより心が歪むことのなかった、確実に信用出来る人材の確保。そして刻印の危険性を訴えることもできる。まさに一石二鳥じゃないか」

男の言葉は止まらない。

「刻印はCWAで回収、保管されていた刻印を使用している。君も知っているだろう？ CWAで刻印消失騒動が起きたことを」

「え？」

男の言葉に、鍵山は思わず頓狂な声を上げる。

「ええ。まさかあれの首謀者が緋川隊長だったなんて」

「!!!」

突然の声に鍵山は振り返る。

いつからそこにいたのか。鍵山の背後には一人の男が静かに立っていた。無感情な目をこちらに向けている。

「分かってくれたかい？ 杉山竜君。僕の意味が」

緋川と呼ばれた男が、鍵山の背後に立つ男に言葉を返す。いつから緋川の言葉は鍵山ではなく、背後の男に投げかけられていたのか。

五章 歪んだ日常？

「それで……人材を確保した後、あなたは一体何をやるつもりなんですか？」

杉山竜の言葉に、緋川は笑みをますます強めた。

「残念だけど、君にはまだ教えてあげられない。その時が来るまでね」

緋川は静かにそう言ったあと、視線を鍵山に向けた。

「さあ、鍵山君」

突然名前を呼ばれ、鍵山は肩を震わせる。

「君は色んなことをやってくれたね。杉山竜君。彼はどんなことをしたんだい？」

鍵山の背後で、杉山竜がメモ帳を取り出す。そして淡々とした声で言葉を吐き出していった。

「暴行傷害五十二件。強姦二件。脅迫、恐喝は数え切れませんね」

「そうかい」

そう言う緋川の顔は相変わらず微笑んでいたが、その眼は笑っていないかった。

「何か言い訳はあるかい？ 鍵山君」

「な、あ……」

鍵山は周りの空気が鋭くなっていくのを感じていた。

「あ、あれは……あんたが……」

鍵山の口から出た言葉はそれだけだった。その言葉で緋川の眼はますます細められる。

「僕が？ 僕が何か言ったかな？ 僕は能力の使い方の説明して、好きに使えと君に言った。それだけだ。誰も犯罪に使えとは言っていない」

「なっ!？」

「所詮、君はそんなところか。さあ、杉山竜君。君は彼をどうした

い？」

緋川は視線を鍵山の背後に向ける。

「……そうですね」

杉山竜はメモ帳をしまいながら、淡々と答える。

「CWA法に照らし合わせれば、禁固20年ってところですかね」

「だが、彼は未成年だ」

「……ええ、ですから最大でも5年、ということになりますね」

「そうなるね。それじゃあ」

緋川の口元が歪む。それはまるで悪魔の頬笑みのようだった。

「建前はそれだけでいい。君の本音を聞こうか？」

緋川の言葉に、杉山竜は一瞬顔を強張らせる。そしてその冷たい視線を鍵山に向けると静かに言い放った。

「殺してやりたいです」

五章 歪んだ日常？

その言葉に緋川の笑みがさらに歪んだ。

「絶対に許せません。今すぐに、この手で」

「杉山竜君。君の意見はよく分かった」

緋川は笑顔をそのまま、鍵山に視線を戻す。再び視線を向けられたことに、鍵山は言いようのない恐怖を感じた。

「杉山竜君。下がっていなさい。彼の処罰は僕がしよう。君は罪を背負う必要はない」

優しく、穏やかな言葉。杉山竜は緋川に一礼した後、踵を返した。杉山竜が校舎へ戻っていくのを見届けた後、緋川はその口を開いた。

「さあ、君と僕の二人だ。鍵山君。残念ながら君をCWA法で裁かせるわけにはいかない」

ゆっくりと、言い聞かせるように緋川は言葉を続ける。鍵山は沈黙したまま緋川の言葉を聞く。

「僕の信条でね。一度心が歪められた人間は 決して元には戻らないと。体面を取り繕いまともには見せることは出来るだろう。だが、決して元には戻らない。歪み切ってしまったてね。強制されたものではない。自由な状態で歪むことを選んだんだ。そんな人間が再び自由になったとき、まともな道を選ぶわけがない」

そういうわけだから と緋川はコートの内ポケットに手を入れる。

「ふふ、懐かしいね。あの時は札東が出てきたけど、今回は違うよ」
緋川はそう言いながら、手を引き抜く。その手に握られていたのは 黒光りする拳銃だった。

「あの頃はまだ良い子だったのに。君は本当に人間の屑へと成り下がってしまった。残念だよ。だけどね。僕も鬼じゃない。君に最後のチャンスを与えようじゃないか」

緋川はそう言うなり、その拳銃を鍵山の足元に放り投げた。

「さあ」

緋川は優しく微笑み、こう言った。

「それで自分の頭を撃ち抜くんだ」

一瞬で血の気が引いていくのが分かる。目の前の拳銃。そして慈母のように微笑む緋川の笑み。

鍵山はどこか異世界に迷い込んだような錯覚を感じていた。

「このまま人間の屑として死ぬのは嫌だろう？ だから自分で自分にけじめをつけるんだ。そうすることが君が人間に戻るために必要なことだ。扱いは簡単。手に持って引き金を引くだけ。さあ」
拾うんだ。

鍵山は呆然と拳銃を眺めていた。そして緋川の言葉に促されるように、ゆっくりと拳銃に手を伸ばす。

「そうだよ。しっかりと持って。そして銃口を自分のこめかみへ」

銃口の先が震えている。だが、まるで何かに操られているかのよう
に鍵山の腕は動き、その銃口は鍵山のこめかみへ向けられた。

「さあ」

緋川の口が動く。

「引き金を」

鍵山の眼から一筋涙が伝う。全身ががくがくと震えている。

「さあ」

緋川はゆっくりと鍵山に告げる。

「引くんだ」

銃声。

「また頭に包帯を巻くことになるとはな」

孝二は自分の頭に巻かれた包帯を指でいじりながらそう呟いた。

「でも孝二君にはそれが似合ってるよ」

隣に座る舞が満面の笑みでそう答えた。

「それ褒め言葉になってないから」

そう言って、孝二はため息を吐いた。

今、孝二達がいるところは保健室だ。入口近くのパイプ椅子に座っている真がコーヒーを飲んでいる。

「今回の貴様は見直したぞ。一瞬力に溺れそうになっていたが、よくあそこから持ち直したな」

「あ、ああ……」

孝二は目を伏せ、自分の右手を見る。同じように包帯を巻かれたその右手を見つめながら孝二は淡々と言葉を紡ぐ。

「自分でもびつくりだよ。あの時、俺は本気であいつを殺そうとしていた」

「よくあることだよ」

孝二の隣に座る舞が、無邪気な声で続ける。

「刻印の力を持った瞬間は誰でも調子にのっちゃん時があるのよ。大切なのはそれを取り越えられた時なんだから、あんまり気にしちゃうダメ。お兄ちゃんだって刻印の力を貰ったばかりの時は暴走しちゃったんだから」

「へえ」

孝二はそう相槌を打ちながら、真に視線を向ける。真は全力で顔をそらした。

「……まあ、それはいいとして、今後俺はどうすればいいんだ？」

「一緒にCWAとして頑張らましょ！」

「いや、えと……そうなるのか？」

舞の言葉に孝二は再び真に顔を向ける。真はこちらを横目でちらりと見やると、静かに言った。

「かつて言っただろう。そこは貴様の自由意志だ。CWAに入ると言うなら歓迎する。入らないと言うなら、その刻印だけ回収させてもらっただけだ」

「……そうか」

孝二はゆっくりと深呼吸をし、自分の額に眠る力を思う。

「なあ」

「何だ？」

孝二は言葉一つ一つを確認するように静かに言った。

「世界中に刻印はあるんだよな」

「ん？ ああ、そうだな。刻印の正確な数は分かっていないからな」

「世界中で今回みたいなきっかけが起きているのか？」

「……ああ、そうなるな。刻印によって人が傷つき、死んでいる」

「……そうか」

孝二は大きく息を吐く。

「どうやらもう決心しているようだな」

真の言葉。それに孝二は大きく頷いた。

「ああ」

真の顔をまつすぐに見る。そしてはつきりとした口調で自分の意思を告げた。

「入れてくれ。CWAに。世界中の人たちの日常を守る力になりたい」

真は鼻を鳴らしながら口元を笑みの形に歪める。

「いいだろう。歓迎しよう。緋川に言っというてやる」

真はそれだけ言っと、顔を窓の外に向ける。

日常を守るためか。

真は目を細め、窓から覗く星空を眺める。

どこかの後輩と同じこと言いやがるな。さすがというか。何というか。

コーヒーを飲みほし、軽く息を吐く。

正義、か。緋川。貴様の本当の目的を 貴様がやるうとし

ていることを　こいつが知ったらどう思うだろうな……。

真は横目で孝二を見やる。その純粋な子供の顔に、真の中に罪悪感に近い思いが浮かんでいた。

「はっはは！」

明るい満月が見下ろす屋上。そこに響く奇怪な笑い声。

「ははは！ ほら！ ほら！ 見ろよ！」

笑い声の主 緋川は自らの胸を押さえながら大笑いしていた。

「ほら、見ろよ。見ろ！ ははははは！！！」

胸を押さえていた手を高らかに頭上に掲げる。その手は 赤く染まっていた。

「く……」

鍵山は何度も荒い呼吸を繰り返しながら、緋川を睨んでいる。その手に持つ銃口は緋川に向けられていた。

「死んで……死んでたまるか！」

鍵山はそう叫ぶなり、引き金を引く。乾いた銃声が鳴り響き、その度に緋川の体がビクンと跳ね上がる。

「はは！ 痛い！ 痛いよ！ 血だ！ これは僕の血だああ！！！」

体中を血に染めながら、緋川は狂ったように笑う。鍵山の持つ銃は全ての弾を撃ち尽くし、ハンマーの金属音が鳴っていた。

「見ろ！ 革新派の屑共！ 歪んだ！ 歪んだ！ 歪んだ！ 歪んだ！」

歪んだあ 緋川は何度もそう叫んでいる。

手の震えが大きくなり、鍵山は銃を落とした。全身の言うことが効かない。目の前の異様な光景から逃れることが出来ない。

「ほら、歪んだよ？ はは、歪んだ！ 僕の血が溢れる。止まらない。痛い。死ぬ。もうすぐ死ぬ」

喉の奥からしゃっくりのような声を上げ、緋川はその場に倒れる。コートは完全にどす黒く染まり、徐々に血の水たまりをそこに形成

させていく。

「は、はは、ははは！ ひやははははあはっはははあっはははあっはははあ
っは……………」

壊れたロボットのように何度も奇怪な笑い声を上げ、のたうちま
わる。やがて笑い声は徐々に小さくなっていき、そして緋川は動か
なくなつた。

「……………」
鍵山は自らの荒い呼吸で鼓膜が破れそうな気分だった。目の前の死体から必死に目をそらそうとするが、金縛りにあってしまったかのように体が動かない。

「動け……動いてくれ」

何度も自分にそう呼びかける。そうするうちに少しずつではあるが体が言うことを聞いてきた。

「……逃げ……逃げるんだ」

緋川の死体に背中を向け、地面を這うように屋上の出口へと向かう。

「早く。あそこだ。もう少し」

出口の扉まで、あと数メートル。すぐ目の前の扉が鍵山には希望に見えた。

あと少し。あと少し。

「あとすこ」

ドクン。

鍵山は蛇に睨まれた蛙のようにその場で固まってしまった。呼吸が荒くなる。自分の心臓の音が耳の奥まで聞こえてきた。全身から脂汗があふれ出し、体がべたつく。

振り返ってはいけない！

頭に突然そんな言葉が浮かぶ。だが、鍵山の体はその言葉に反し、まるで何かにとりつかれたかのように向きを変えていく。

だめだ！ 振り返るな！

全身で警鐘が鳴り響く。だが、体の動きは止まらない。

徐々に 徐々に視界が背後をとらえていく。

だめだ！　だめだ！

「う……わあ……」

喉の奥からはそんな言葉しか出なかった。やがて視界は完全に背後の光景をとらえてしまった。

「あ、あ……」

鍵山は口を大きく開ける。だが肝心の言葉が全然出てこない。

「あ、ああ……」

鍵山の視線の先　満月に照らされ、何かのステージのように照らされたその場にあるもの。

そこには　緋川が立っていた。

足元まで届く、赤黒く染まったコートが風に揺れている。大きく見開かれた眼と、三日月のような笑みを浮かべた顔がこちらをまっすぐに向けられていた。

その右手には いつの間にか巨大な鎌のような物が握られていた。鍵山の心臓が激しく音を立てる。何度も呼吸を繰り返すが、ちゃんと呼吸が出来ていないのか、段々息苦しくなってくる。

緋川の左手がゆっくりと動き、自らの顔に触れる。

途端 顔の皮を剥ぎとった。

「
！」

そこから覗くのは人間の顔ではない。赤く血走った眼と肉食獣の牙。そして黒く反り立つ二本の角。

次に左手は肩に触れ、そして衣服ごと人間の皮を脱ぎ去った。辺りに血や内臓が、噴水の如く飛び散る。

そしてそこに残ったのは、獣の体毛と牙を持つ、恐ろしい化け物だった。先ほどまでであった人間の面影などどこにも残っていないかった。

その化け物の胸の中心が黄金に輝いていた。そこには『XIIII』と描かれており、その周りを囲うように皮膚を剥ぎとられた人間の顔のような物が無数に描かれていた。

「ナンバー13。コノ刻印ノ名ハ『死神』」

化け物が淡々とそう告げた。そしてゆっくりとした足取りで、鍵山に近づいていく。

「僕ノ命ガ絶タレタ時、コノ能力ハ発動スル」

ゆっくりと鎌を振り上げ、静かに化け物は告げた。

「僕八君ノ命ヲ貰イ、肉体ヲ取り戻ス。ソシテ永遠ニ生き続ケル。

死又コトハ決シテ許サレナイ。ソレガ 『死神』」

鍵山の瞳に映る自らの姿をとらえ、化け物の目が細められる。

「サヨナラダ。ダケドネ、信ジテクレ。僕ハ化ケ物ジャナイ 人
ナンダ。人間ナンダ……」
そして 鎌は振り下ろされた。

自分の心音も聞こえてきそうなのほど静まり返った校舎。

杉山竜は暗い廊下の窓から外を眺めていた。その視線の先には向かいの校舎にある保健室があった。孝二と真と舞が何やら話をしてる。

「会いに行かないのかい？」

背後からの声に杉山竜は振り返る。そこには足元まで届く長いベージュのコートを着た緋川がいた。何事もなかったかのような涼しい顔をしている。

「僕にとつての日常ですから」

淡々と答える杉山竜は悲しげな眼をしていた。

「そうかい」

緋川はそれだけ言うと、同じように保健室のほうに視線を向ける。その手元では白い筒状の物体をくるくるとまわしていた。

「その皇帝の刻印、どうするんですか？」

「どうしようか」

緋川は困ったような表情を浮かべる。

「そうだね。また適当な人に埋め込んでもいいけど、この能力は歪んでしまった場合、回収に骨が折れるからね。しっかりと見極めないといけないね」

刻印を指ではじき、宙に舞うそれを眼で追う。

「ああ、そうだ。轟君で成功したから、その恋人の木下千里君に埋め込んでみてもいいかも」

「緋川隊長」

緋川を指ささげると、杉山竜はその名を呼ぶ。緋川がそ

ちらへ顔を向けると、杉山竜のほほ笑んだ顔が緋川をまつすぐにとらえていた。だがその眼は笑っておらず、鋭い殺意がこめられていた。

緋川は静かに微笑み、その手に持つ刻印を銀色のケースに収めた。「……ああ、良い眼だ。君には本当に期待しているよ」

緋川はそれだけ言うつと踵を返し、足音も立てずに暗闇の中へと消えていった。

残された杉山竜はその背中を　暗闇の奥をいつまでも見つめていた。

終章 帰ってきた日常？

次の日の学校はいつもと変わらない日常を催していた。

校内では特に怪しい噂話もなく、奴隷として操られていた生徒たちも、何事もなかったかのように友人と談笑していた。中にはケガを負っていた者もいたが、特に気にしているようには見えなかった。

「……………」

孝二は不思議でならなかったが、こういった情報操作もCWAの仕事だと真から教えられた。

鍵山の処遇はどうなったのかは聞かされなかったが、

「大丈夫。もう彼は君の前には現れないよ。永遠にね」

という緋川の言葉に安堵すると共に、どこかうすら寒さを感じた。

終章 帰ってきた日常？

昼休み。孝二は学校から出て病院へ向かった。

孝二は病院の入り口にもたれかかるようにして、その中をちらちらと見ていた。その手には花束が握られている。

「それでは、お大事に」

廊下の奥から医者の方が聞こえてくる。孝二がそちらを見ていると、廊下の奥から待ち焦がれた相手の姿が現れた。

「……千里」

「あ、孝二」

こちらの姿を確認した千里が、こちらに小走りに駆けてくる。

「待っていてくれたんだ」

「ああ、それと……ベタだけどこれを」

孝二はそう言って千里に花束を渡す。

「わあ綺麗。ありがとう」

「それで良かったかな？ 他にもいろいろ考えたんだけど」

「花貰ったら女は誰だって嬉しいって」

千里はそう言って、満面の笑みを浮かべる。その笑みを見ているだけで、こちらも幸せな気持ちになる。

「それと ちょっといいかな？」

孝二は病院から出て、人気のないところへと進んでいく。

「どうしたの？」

千里が後からついてくる。やがて周りが木々に囲まれた場所で孝二は立ち止まり、千里に向き直った。

「千里」

孝二は千里の名を呼ぶ。いつもと様子の違う孝二に千里は黙った

まま孝二を見つめる。孝二は静かに口を開き、言葉を紡いでいく。

「俺、ガキでさ。今まで自分のことばっか考えてた」

千里の顔をまっすぐに見る。

「でも、もうガキは卒業したい。千里に心配かけられるような男になりたくない」

孝二は両手を千里の肩にかけ、言葉を続ける。

「これからは、いや、ずっと、千里を見つめていたい。千里のことを、まっすぐに。えと、だから……」

孝二はしどろもどろになりながらも、最後ははっきりと言葉を告げた。

「要は 俺は千里のことを心の底から愛してるってことだ。今までも。そしてこれからも、ずっとだ」

その言葉に千里は顔を赤らめ、若干伏し目がちになりながら口を開く。

「なんか……言ってること無茶苦茶だけど……言いたいことはなんとなく分かったけど……」

「千里！」

孝二は千里との距離を詰める。互いの顔がすぐ目の前にある状態。互いの呼吸が頬をくすぐる。

「……………」

孝二と千里は顔を真っ赤にしながら、見つめあう。しばらくして孝二が口を開き、ポツリと言った。

「えっと……キス、してもいい？」

「……………いちいち聞くな！」

千里が顔を真っ赤にして怒鳴る。

「分かった」

孝二はそう言うなり、一気に顔を近づけ、互いの唇と唇を合わせた。

風が優しく舞い、二人の髪を撫でる。二人はまるで時が止まったかのように、いつまでも互いの香りを感じていた。

終章 帰ってきた日常？

学校近くの駐輪場。そこにやたらと派手でどでかいバイクが置かれていた。

「ほら〜見て見て。改造して三人乗りが可能になったんだよ〜」
能気な優の声。

「あんた……これ捕まるでしょ〜！」
呆れたような千里の声。

「相変わらずだな、優。乗るのはいいけど、責任は取らないぞ」
ため息交じりの孝二の声。

「つて、こら、孝二！ 馬鹿優の誘いに乗らない！」
千里がバイクに跨ろうとする孝二を必死に止める。

「もう、千里ちゃん硬いよ。ちゃんと警察の巡回ルートは把握してるし、逃走経路もちゃんと確保しているから、大丈夫だよ」

「お前、その情報どっから持ってきた……？」
「ちよつとある筋からね。それに千里ちゃんも興味津々なんですよ？」

「え、わ、私は別に……」
巨大なマフラーを覗き込んでいた千里は慌てたように首を左右に振る。

「いいじゃねえか、千里。軽くその辺走ろうぜ」
孝二がそう提案すると、千里はしぶしぶと言った様子で頷いた。
「うん、孝二がそう言うなら」

そんな千里の様子に、優は目を細めてにやにやと口元を緩める。
「見せつけちゃってえ。なんか二人、以前よりホットだね。もしかしてとうとうナイトフィーバーやっちゃった？」

「アホか!〜!」

「アホか!！」

孝二と千里、二人同時のツッコミに優は思わず爆笑していた。

「まあ、いいや。さあ、さっさと行こうよ。千里ちゃんが真ん中で轟が一番後ろね。これが本当の翔るだね」

「はい、孝二、真ん中」

「あいよ」

「ああ、二人ともスル とかひどい!！」

そんな会話をしながら、もたもたしていると、背後から突然声をかけられた。

終章 帰ってきた日常？

「げ！ この派手なバイクってお前のだったのか？」

驚きの声に振り返ると、見慣れた顔の男子学生二人組がいた。

「おお、和也と雄二じゃん」

孝二が二人の名を呼ぶ。彼らは中学からの友人だ。

「へへへん。いいでしょう」

優は二人に自慢のバイクを見せびらかす。

「……別にいいとは思わねえよ。こんなの街中走れねえし。まあ、ヘンテコ兄弟にはぴったりかもな」

「ヘンテコって……まだそのあだ名生きてたのかよ」

和也の言葉に孝二は顔をしかめる。

「ヘンテコ？ 何それ？」

和也の隣の雄二が、そう尋ねる。和也はバイクの車体をつつきながら、答えた。

「ああ、お前は知らねえか。こいつら二人の名字が変だからよ。だから中学の時ヘンテコ兄弟って言ってたんだ」

「懐かしいわね」

和也の言葉に千里がクスクスと笑う。

「ヘンテコ？ そういえば二人の名字ってなんだっけ？」

雄二の問いに、和也は孝二を指さしながら答える。

「えっと、まずこいつが『轟』で」

そして優に指先を合わせ、その名字を言った。

「そんで、こいつの名字が『杉山竜』なんだよ」

「杉山竜って、それ完全に一つの名前じゃん」

雄二は思わず吹き出していた。

「……悪かったね。バランス悪い名字で。本当嫌になるよ。バイト

の先輩にはずっと『杉山』って言われてるし」

「まあ、元気に生きる」

「言われなくても。もう轟、千里ちゃん。早く行こう。はい、ヘルメット」

バイクのエンジンがかかり、轟音が鳴り響く。

「それじゃあな」

和也と雄二が手を振る。バイクに跨った三人はそれに肩越しに手を振り返した。

「もう気分悪くなったよ。がんがん飛ばすよ！」

優の乗ったバイクはどんどんスピードを上げていく。

「ちよつと飛ばしすぎだつて！」

「聞こえな〜い」

冷たい風がどンドン体を突き抜けていく。孝二は必死に優の肩をつかんでいた。

ふと孝二は千里のことが気になり、ちらりと背後を見る。

千里は満面の笑みを浮かべ、片手を振り上げていた。

「一番楽しんでんじゃねえか！」

「え、な〜に？」

「何でもねえよ！」

孝二はそう言うなり、同じように片手を振り上げた。

「お、二人とも乗ってきたね！」

爆音を轟かせ、バイクは無限の道を滑走していった。

孝二は風を感じながら、優の肩をつかむ自分の手、そして自分の肩をつかむ千里の手をしっかりと意識する。

日常が、

「日常が戻ってきた！」

満面の笑みでそう叫んだ。それは孝二が久しぶりに浮かべた笑顔だった。

E
N
D

終章 帰ってきた日常？（後書き）

あとがき

読んでいただきありがとうございました。

この作品は中学の時に書いたものを加筆修正したものです。

初めは誤字脱字や話の矛盾点、全体のバランスがひどく、とても読めたものじゃありませんでした。話の筋は変えていませんで、今の完成品でもあまり変わり映えしませんが（笑）

こんな駄作ですが、それでもあなたの中に何かしらの思いが残ってくだされば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3455i/>

Collect Waste Articles

2010年12月4日05時25分発行